



TITLE:

隋唐時代における對外使節の假官と借位

AUTHOR(S):

石, 曉軍

CITATION:

石, 曉軍. 隋唐時代における對外使節の假官と借位. 東洋史研究 2006, 65(1): 37-77

ISSUE DATE:

2006-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/138187>

RIGHT:

隋唐時代における對外使節の假官と借位

石 曉 軍

はじめに

- 一 隋代における對外使節の假官
- 二 唐代前半期における對外使節の假官
- 三 唐代後半期における對外使節の假官
- 四 對外使節の假官の性格と賜紫緋魚袋
おわりに

はじめに

外交使節の官職と位階は地位と身分を示すものだけではなく、直接に相手國に對する評價の度合いを示し、派遣國の對外意識を推し量るバロメータにもなりうる。それゆえに、使節の官品の高低は、派遣側と受入側に對しても同様に重要であり、極端に言えば、外交交渉の成否と直接な關連があると言える。

ところが、對外使節の適任者が必ずしも高い官職と位階をもった人物とは限らない。従つて、歴代の對外遣使にあたつては、通常なら與えられることのない一定の資格が必要に應じて暫定的に使節に與えられるということは常に行われていたようである。隋唐時代も同様であり、文獻史料には、出使の際に使節の地位を強化するために、假、借、兼、攝、加、檢校、賜などの様々な形で、一定の官職や位階および可視的身分標識たる服色（紫・緋）と魚符（魚袋）が、對外使節擔當

者に假授（借授）された關係記事がしばしば見られる。また、「入蕃使等、別敕借緋紫者、使回合停⁽¹⁾」という敕令で示されるように、入蕃使（對外使節）等に借授された身分標識である紫・緋の服色については、使節の使命が完成されると伴い無効となり、朝廷に返納しなければならぬのである。言葉をかえれば、隋唐時代においては、出使のための臨時的な措置として、對外使節に對する官職と位階の假授（借授）——いわゆる假官あるいは借紫緋の制が存在していたのではないだろうかと考えられる。

從來、この問題については、大庭脩氏⁽²⁾によつて日本遣唐使の借位問題が提起されて以來、日本史研究者の河合ミツ氏⁽³⁾とりわけ加藤順一氏⁽⁴⁾が日本古代の借位制に關する論考の中で、古代日本の借位制の起源が中國の漢魏以降に盛行していた假官・假號の制に遡れると同時に、唐制にも借緋・借紫の制が存在していたのではないかと觸れられているほかは、とくに詳しく検討されていないようである。數年前に筆者はこの問題を取り上げて考察したことがあるが、前稿が未公開の學位論文の一部⁽⁵⁾なので、本稿では、舊稿を踏まえたうえ、その後の若干の新知見を加えて隋唐時代における對外使節の假官と借位の實態や様相を検討してみたい。

一 隋代における對外使節の假官

隋代において、對外使節に對する假官の實例については、まず柳謩之の例を挙げることができる。開皇一八年（五九八）に、正四品の光祿少卿柳謩之が光化公主の護送使として吐谷渾に遣わされた時に、

以謩之兼散騎常侍、送公主於西域。（『隋書』卷四七「柳謩之傳」）

とあるように、柳謩之が從三品の散騎常侍を兼ねて出使したのである。後に彼は義成公主の護送使として突厥に派遣された時にも同様に散騎常侍を兼ねていた。そして、歸命後の柳謩之は肅州刺史に遷されたことから見れば⁽⁶⁾、この散騎常侍は明らかに出使のために一時的に假授されたものであった。

以上の二例のほか、隋初の遣陳使も殆どは散騎常侍又は通直散騎常侍を兼ねる形で出使していたと見られる。以下は、『隋書』卷一「高祖本紀」より拾った開皇九年（五八九）の陳朝平定までの遣陳使の事例である。

A. 開皇元年（五八二）一月丁卯、鄭弼が散騎侍郎を兼ねて陳に出使した。⁽⁷⁾

B. 開皇三年（五八三）夏四月辛卯、薛舒が散騎常侍を兼ね、王劭が通直散騎常侍を兼ねて陳に出使した。⁽⁸⁾

C. 開皇三年（五八三）閏二月乙卯、曹令則が散騎常侍を兼ね、魏澹が通直散騎常侍を兼ねて陳に出使した。⁽⁹⁾

D. 開皇四年（五八四）冬十一月壬戌、薛道衡が散騎常侍を兼ね、豆盧寔が通直散騎常侍を兼ねて陳に出使した。⁽¹⁰⁾

E. 開皇五年（五八五）九月丙子、李若が散騎常侍を兼ね、崔君贍が通直散騎常侍を兼ねて陳に出使した。⁽¹¹⁾

F. 開皇六年（五八六）八月辛卯、散騎常侍の裴豪と通直散騎常侍の劉顗が陳に出使した。⁽¹²⁾

G. 開皇七年（五八七）夏四月甲戌、散騎常侍の楊同と通直散騎常侍の崔儼が陳に出使した。⁽¹³⁾

H. 開皇八年（五八八）三月甲戌、程尙賢が散騎常侍を兼ね、韋憚が通直散騎常侍を兼ねて陳に出使した。⁽¹⁴⁾

以上の事例によれば、散騎常侍または通直散騎常侍の本官で派遣されたF、Gの二例を除いて、他の六例の本官は不明であるが、いずれも散騎常侍や通直散騎常侍を兼ねるという形で陳朝に派遣されていたことがわかる。一方、陳の遣隋使も隋の遣陳使と全く對等の官職で隋に派遣されていたのである。⁽¹⁵⁾

隋の散騎常侍（從三品）と通直散騎常侍（正四品）は何れも門下省に屬する散官で、四人の定員があり、皇帝の側近として出使・慰勞することがこの二つのポストの主な職務内容であったようである。⁽¹⁶⁾ところが、専任が少ないため、上述のように、對外使節に散騎常侍と通直散騎常侍を假授して出使させることが盛んに行われていたわけであろう。また『隋書』卷一二「禮儀志」七の「貂蟬」の條には次のような規定があり、

開皇の時、門下省に屬する散騎常侍の全員に貂蟬を與えたが、今はそれをやめて、外國に出使される散騎常侍のみに特別に貂蟬を給附する。歸國するとそれを内省に返納する。（開皇時、加散騎常侍在門下者、皆有貂蟬、至是罷之、唯加

常侍聘于外國者、特給貂蟬、還則輸納於內省。

これによれば、隋の前半はすべての散騎常侍に貂蟬（貂尾と副羽で飾られる冠）という貴族高官のステータスシンボルを配付するが、隋の後半期になってから對外使節として派遣される散騎常侍には、出使の間に限って、特別の待遇として貂蟬が假授されたことがわかる。言葉換えれば、從三品の散騎常侍および正四品の通直散騎常侍は、隋代の前半期だけではなく、後半期になっても依然として對外使節に對してよく假授される假官ポストであったと推察できよう。ところが、残念ながら現時點で、隋の後半期の關係史料のなかには、對外使節に假授される散騎常侍や通直散騎常侍の實例が見当たらないので、今後の研究に譲りたい。

隋の後半期における對外使節の假官については、關係史料が少ないが、大業四年（六〇八）倭國に派遣された裴世清の例に注目したい。裴世清の官職については、『隋書』卷八一「倭國傳」をはじめとする中國側の文獻に「文林郎」とあるのに對し、『日本書紀』卷三二・推古十六年八月壬子條に載せている唐の國書に「鴻臚寺掌客」とあり、『元興寺伽藍緣起』にも「大隨國使主鴻臚（臚）寺掌客裴世清」と明記され、中國側の記事に比して明らかに食い違っている。この點については、從來様々な解釋があり、例えば、増村宏氏によると、「裴世清はこの鴻臚寺所屬の四方館關係の係員となったことがあり、そのために來朝して「鴻臚寺掌客」と稱したか、あるいはそうでなくて、「文林郎」より理解しやすい、使節にふさわしい「鴻臚寺掌客」を稱したものか、と推測する。」⁽¹⁷⁾といい、また、池田溫氏は、「派遣時の正式官名はこれ（鴻臚寺掌客）であった。文林郎が散官もしくは學藝文筆の名譽職なのに比し、こちらは對外接衝の實務にたずさわる職事官であり、外國遣使の任務をおびたのもありうることである。」と解釋されている。⁽¹⁸⁾兩氏の解釋はやや異なっているが、裴世清は鴻臚寺掌客の肩書で倭國に遣わされたという點は一致している。兩氏の推論の上で取えて臆測すれば、鴻臚寺掌客は王朝外交の實務を擔當する官職であるから、使節の假官ポストとして裴世清に假授される可能性も考えられる。言い換えれば、すなわち文林郎は裴世清の本官で、鴻臚寺掌客は出使時の假官ポストではなからうかと考える。後述する唐代

前半期における鴻臚の職はよく假官ポストとして使節に假授されることを合わせ考えれば、これは隋の後半期と唐の前半期における對外使節の假官の重要な特徴であったようである。

二 唐代の前半期における對外使節の假官

唐初には、對外使節が假官ポストで出使される代表的な事例については、貞觀の初年に高句麗・新羅・百濟の三國間の紛争を調停するため、新羅の要請により朝鮮半島に派遣された朱子奢の例を挙げることができる。『舊唐書』一八九上「朱子奢傳」によれば、從六品上の國子助教である朱子奢が、從五品下の員外散騎侍郎を假授されて朝鮮半島に出使されていたのである。⁽¹⁹⁾唐初の高祖・太宗・高宗の三朝における對外使節の假官については、史料にはこの一例しか見られないが、武德四年（六二二）七月に通直散騎侍郎の庾文素が新羅に派遣されたこと、および貞觀元年（六二七）一〇月に員外散騎常侍の韋叔諧と員外散騎侍郎の李公淹が南平獠に遣わされ、外交交渉の大成功を収めたことをあわせて考えれば、隋の時代と同じように、唐初における散騎常侍や散騎侍郎の官職は、依然として外交使節に相應しい主な假官ポストとして、對外使節に假授されていたことが推測できる。

ところが、武后朝以降においては、對外使節が攝、兼、假、檢校などの形でそれ以外の官職を兼ねて出使される事例がよく見られる。武后朝以降の對外使節の假官ポストを整理してみると、色々な官職があるが、主な傾向として概ね下記の二つの方面に集中していると見られる。

A. 外交官たる鴻臚寺の諸官職。（以下は「鴻臚職」と略稱）

B. 憲官たる御史臺の諸官職。（以下は「憲職」と略稱）

このうち、Aは主に唐の前半期（とりわけ武后朝～玄宗朝の間）に與えられていたのに對し、Bは主に安史の亂後の唐後半期に與えられていたと見られる。本節では、先ずAに關する實態を考察してみたい。武后朝～肅宗朝における對外使節に

對するすべての假官の事例を年代順に纏めてみると次の通りである。

【表二】 武后朝～肅宗朝における對外使節の假官一覽

| No. | 派遣年月 | 使節 | 本官(品) | 假官(品) | 類別 | 派遣先 | 主 要 出 典 | 時期 |
|-----|-------------------|-----------|-----------------|-----------------------|----|-----|--|----|
| 1 | 萬歲通天元年 九月(六九六) | 郭元振 | 通泉尉(從九下) | (授)右武衛胄曹參 軍(正八下) | 議和 | 吐蕃 | ●舊97郭元振傳●新216吐蕃傳上●冊655奉使 部・智識、661奉使部・守節、964外臣部・封冊 2●全23郭元振行狀 | 武后 |
| 2 | 神功元年三月 (六九七) | 田歸道 | 左衛郎將(正五上) | (攝)司賓卿 (從三) | 冊立 | 突厥 | ●舊185田歸道傳●冊655奉使部・智識、661奉使 部・守節、964外臣部・封冊2 | |
| 3 | 聖曆元年七月 (六九八) | 閻知微 | 右豹韜衛大將軍 (正三) | (攝)春官尚書 (禮部尚書)(正三) | 和親 | 突厥 | ●舊194突厥傳上●鑑206聖曆元年八月條●冊964 外臣部・封冊2 | 中宗 |
| 4 | | 楊齊莊 | 右武衛郎將 (正五上) | (攝)司賓卿(從三) | | | | |
| 5 | 神龍三年年初 (七〇七) | 臧思言 | 不明 | (假)鴻臚卿(從三) | 不明 | 突厥 | ●舊194突厥傳上●新215突厥傳上●舊7中宗本 紀 | 中宗 |
| 6 | 景龍四年二月 (七一〇) | 楊矩 | 左驍衛大將軍 (正三) | (檢校)鴻臚卿 (從三) | 和親 | 吐蕃 | ●舊196吐蕃傳上●新216吐蕃傳上●舊7中宗本 紀●墓誌・先天003楊孝弼墓誌 | |
| 7 | 景雲二年一〇月 (七一一) | 和逢堯 | 御史中丞(正五上) | (攝)鴻臚卿(從三) | 宣諭 | 突厥 | ●舊185和逢堯傳●鑑210景雲二年十月條●會94 北突厥 | 睿宗 |
| 8 | 先天二年二月 (七一二) | 崔忻 (忻) | 郎將(正五上) | (攝)鴻臚卿(從三) | 冊立 | 渤海 | ●舊199渤海傳●冊964外臣部・封冊2●傳唐鴻 臚井遺蹟刻石 | 玄宗 |

| | | | | | | | | | |
|-----------------------------|----------------------------|---|--|---------------------------------|---------------------------------|-----------------|----------------------------------|----------------------------------|-----------------|
| 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 |
| 乾元元年七月 | 天寶一四年?月 (七五五) | 開元二五年二月 (七三七) | 開元一九年三月 (七三二) | 開元二六年 (七二八) | 開元一三年 四月(七二五) | 開元八年 九月(七二〇) | 開元七年 六月(七一九) | 開元二年 五月(七一四) | 先天二年七月 (七一三) |
| 李瑀 | 崔光遠 | 邢璣 | 崔琳 | 喬夢松 | 袁振 | 張越 | 吳思謙 | 解琬 | 李暉 |
| 漢中郡王(正一)・ | 京兆少尹(從四下) | 左贊善大夫 (從四下) | 鴻臚卿(從三) | 大理正(從五下) | 中書直省(?) | 左驍衛郎將 (正五上) | 左監門率(正四上) | 金紫光祿大夫 (致仕) | 左清道率(正五上) |
| (試)太常卿(正三)、 | (兼)御史中丞 (正五上) | (攝)鴻臚少卿 (從四上) | (加)御史大夫 (從三) | (攝)鴻臚少卿 (從四上) | (攝)鴻臚卿(從三) | (攝)郎中(從五上) | (攝)鴻臚卿(從三) | (授)左散騎常侍 (從三) | (攝)宗正卿(從三) |
| 和親 | 弔祭 | 冊立 | 會盟 | 冊立 | 宣諭 | 不明 | 弔祭 | 會盟 | 弔祭 |
| 廻紇 | 吐蕃 | 新羅 | 吐蕃 | 于闐 | 突厥 | 靺鞨 | 渤海 | 吐蕃 | 吐蕃 |
| ●舊195廻紇傳、95李瑀傳●新217回鶻傳●鑑217 | ●舊196吐蕃傳上、111崔光遠傳●新216吐蕃傳上 | ●舊199新羅傳・9玄宗本紀●新220新羅傳●三國史記9新羅本紀9●冊964外臣部・封冊2 | ●舊8玄宗本紀、196吐蕃傳●新216吐蕃傳●鑑213開元十九年一月條●冊654奉使部・恩獎、979外臣部・奉使●全40 | ●新221疏勒傳●冊964外臣部・封冊●全39冊疏勒王于闐王書 | ●舊194突厥傳上●新215突厥傳上●鑑212開元十三年四月條 | ●冊986外臣部・征討5 | ●鑑212開元七年三月條●冊974外臣部・褒異●海東繹史11渤海 | ●舊100解琬傳上●新216吐蕃傳上●全250授解琬左散騎常侍制 | ●冊979外臣部・和親2 |
| 肅宗 | 玄宗 | | | | | | | | |

| No. | 派遣年月 | 使節 | 本官(品) | 假官(品) | 類別 | 派遣先 | 主要出典 | 時期 |
|-----|-----------------|------------------|----------------------|---------------------------------|----|-----|---------------------|----|
| 18 | (七五八) | *李巽 | 殿中監(從三) | (攝)御史大夫 (從三) | | | 乾元元年七月條●冊979外臣部・和親2 | 肅宗 |
| 19 | | 右司郎中より兵部郎中に(從五上) | (攝)鴻臚卿(從三)・御史中丞(正五上) | | | | | |
| 20 | 乾元二年六月 (七五九) | 李通 | 左金吾衛將軍 (從三) | (試)鴻臚卿(從三)・ (攝)御史中丞 (正五上) | 弔祭 | 廻紇 | ●舊195廻紇傳 | |
| 21 | 寶應元年年末 (七六二) | 尙衡 | 左散騎常侍(從三) | (兼)御史大夫 (從三) | 宣慰 | 廻紇 | ●會98廻紇 | |

凡例・

①使節名は、無印は大使、*印は副使、△印は判官。

②「類別」欄の「冊立」「宣諭」「宣慰」「賜物」「弔祭」「告哀」「通好」「修好」「和親」「會盟」「議和」などは、いずれも史料に見られる用語をそのまま借用するものである。

③「主要出典」欄には頻出する文獻について略號を使用する。舊Ⅱ『舊唐書』、新Ⅱ『新唐書』、冊Ⅱ『冊府元龜』、鑑Ⅱ『資治通鑑』、會Ⅱ『唐會要』、墓誌Ⅱ『周紹良主編『唐代墓誌匯編』、全Ⅱ『全唐文』。文獻の後ろの数字は卷數を示す。

④上端の通し番號は、使節派遣の時間順に基づき假に附した番號である。

【表二】から明らかなように、武后朝～肅宗朝における對外使節への假官の全二例の内、「假」、「攝」、「檢校」、「試」等の形で鴻臚卿や鴻臚少卿(武后朝の六八四年から七〇五年までに司賓卿・司賓少卿と改稱)を假授された事例は一二例(No.2、4、5、6、7、8、11、13、14、16、19、20)に上る。もし更に鴻臚卿の本官をもつ事例(No.15)をも考えあわせると、實際には鴻臚寺の事例は全體の三分の二に近い割合を占めていると言ってもよいであろう。しかも、その大半は武后朝から

玄宗朝までの時期に集中していると見られる。肅宗朝の數例の場合は、假官ポストには鴻臚職と憲職は半々であるが、これは唐の後半期における對外使節の假官ポストが鴻臚職から憲職へ變化し始めたことを示す兆ではないかと思う。No. 19の事例を例として見てみると、乾元元年（七五八）七月に寧國公主を廻紇に護送するために派遣されたこの和親使節團では、兵部郎中（從五品上）の李巽が使節團の副使・禮會使として同時に鴻臚卿（從三品）と御史中丞（正五品上）との二つの假官ポストを假授されただけでなく、大使である漢中郡王（正一品・殿中監（從三品）の李瑀にも試太常卿（正三品）・御史大夫（從三品）が假授されたことはまさに象徴的な出來事であろう。

勿論、唐の後半期になっても對外使節に鴻臚職を受けることがないことはない。肅宗朝以降の事例として、例えば、

● 德宗の建中三年（七八二）一〇月に、殿中少監の崔漢衡が鴻臚卿に遷され、會盟を交渉するための「計會使」として吐蕃に派遣された。⁽²³⁾

● 順宗の永貞元年（八〇五）一月に、通王府長史の孫杲が鴻臚少卿に遷され、御史中丞を攝して「冊立使」として回鶻（廻紇）に派遣された。⁽²⁴⁾

● 憲宗の元和五年（八一〇）七月に、陝州大都督府左司馬・兼通事舍人の李銛が鴻臚少卿に任命され、御史中丞を攝して吐蕃に派遣された。⁽²⁵⁾

等が見られる。ところが、ここの鴻臚卿や鴻臚少卿の官職も遣使の直前に授けられたものであるものの、前述した使節に對する假官の性格とは少し異なっているのではないかと思う。というのは、上述した事例に見られる鴻臚卿や鴻臚少卿への異動が官僚の遷轉に關するものであるに過ぎず、その上に加えられた御史中丞などの憲職こそが遣使のために假授された假官ポストであろうと考えるからである。この點についてはまた次節でも觸れる。

また、【表二】から見れば、景龍四年（七一〇）の檢校鴻臚卿の一例（No. 6）を除いて、すべての使節の本官は正・從四、五品上・下の位階の官職であり、正五品上の郎將では、從三品の鴻臚卿に比べて五階の格差がある。これは普通の昇進に

は考えられないことである。したがって、鴻臚卿を使節に假授することは、明らかに對外使節の位階を上げる意味を有するのである。一方、鴻臚卿をはじめとする鴻臚の職が假官ポストとして對外使節に授けられる原因は、言うまでもなくこれだけではない。周知のように、唐代における外交の實務を擔當する最高ランクの責任者として、鴻臚卿と鴻臚少卿の主な職掌の一つは對外使節としての出使である。⁽²⁶⁾それゆえ、鴻臚の職は、唐初の散騎常侍や散騎侍郎に代わって、武后朝から玄宗朝にかけて對外使節に一番ふさわしい假官ポストとなっていたのであろう。

以上、本節に述べたことを要約してみると、唐の前半期とくに武后・中宗・睿宗・玄宗の時代における對外使節の假官に關する最大の特徴と言え、使節の鴻臚職への假官であったと言えよう。

三 唐代の後半期における對外使節の假官

玄宗朝以降、對外使節の主な假官ポストが次第に鴻臚職から憲官たる御史臺の諸官職に變わったことは、すでに前節で少し觸れたが、本節では、更にその實態と様相について検討して行きたい。

個々の假官例を取り上げて個別に分析するのは重要な研究方法であるが、事例が多すぎるので、前節と同じように、年代順で肅宗朝以降における假官例を一覽表〔表二〕に纏めることにしておこう。史料に見られる肅宗朝から唐末までの對外使節の假官の事例を拾い出すと次のようである。

【表二】 肅宗朝～唐末における對外使節の假官一覽

| No. | 派遣年月 | 使節 | 本官(品) | 假官(品) | 類別 | 派遣先 | 主 要 出 典 | 時期 |
|-----|----------------|----|----------------------|------------------------|----|-----|--|----|
| 1 | 乾元元年七月 (七八) | 李瑀 | 漢中郡王(正一)・ 殿中監(從三) | (試)太常卿(正三)、 (攝)御史大夫 | 和親 | 廻紇 | ●舊195廻紇傳、95李瑀傳●新217回鶻傳●鑑220 乾元元年七月條●全42寧國公主下降制●顏真 | 肅宗 |

| 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
|---------------------------------|--|---|---|-----------------|-----------------|--|------------------------------|------|
| 大曆二年二月 (七六七) | 大曆元年二月 (七六六) 陽濟 (楊濟) | 廣德元年七月 (七六三) | 廣德元年三月 (七六二) | 廣德元年三月 (七六二) | 寶應元年年末 (七六一) | 乾元二年六月 (七五九) | | |
| 薛景仙 | 陽濟 (楊濟) | 王翊 | *崔倫 | 李之芳 | 尚衡 | 李通 | *李異 | |
| 檢校戸部尚書 (正三) | 大理少卿(從四上) | 左散騎常侍(從三) | 太子左庶子 (正四上) | 左散騎常侍(從三) | 左散騎常侍(從三) | 左金吾衛將軍 (從三) | 右司郎中より兵部 郎中に(從五上) | |
| (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史大夫 (從三) | (試)鴻臚卿(從三)、 (攝)御史中丞 (正五上) | (攝)御史中丞 (正五上)・鴻臚卿 (從三) | (從三) |
| 修好 | 修好 | 冊立 | 通好 | 宣慰 | 弔祭 | | | |
| 吐蕃 | 吐蕃 | 廻紇 | 吐蕃 | 廻紇 | 廻紇 | | | |
| 好 ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●冊980外臣部・通 | ●陽濟墓誌銘(墓誌、貞元070)●舊196吐蕃傳、 11代宗本紀●鑑224大曆元年二月條●冊980外臣 部・通好 | ●舊195廻紇傳●新217回鶻傳●鑑223廣德元年七 月條●全49代宗冊尊號敕文 | ●新216吐蕃傳●鑑222廣德元年四月條●舊196吐 蕃傳●冊654奉使部・恩獎、980外臣部・通好● 全41授崔倫尚書左丞制 | ●會98廻紇 | ●舊195廻紇傳 | 卿、鮮于叔明碑(顏魯公文集6)●冊979外臣 部・和親一、652奉使部・宣國威 | | |
| 代宗 | | | | | 肅宗 | | | |

| No. | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
|---------|--|-------------|--|---------------------------------------|---|---|---|--|
| 派遣年月 | 大曆三年二月 (七六八) | | 大曆三年七月 (七六八) | 大曆四年六月 (七六九) | 大曆六年四月 (七七二) | 大曆一四年八月 (七七九) | 建中元年五月 (七八〇) | 建中二年三月 (七八一) |
| 使節 | 歸崇敬 | *陸斑 | 蕭昕 | △董晉 | 吳損 | 韋倫 | 韋倫 | 崔漢衡 |
| 本官(品) | 倉部郎中(從五上) | 監察御史(正八上) | 國子祭酒より左散騎常侍に(從三) | 祠部郎中(從五上) | 諫議大夫(正五上) | 太常少卿(正四上) | 太常卿(正三) | 萬年縣令より殿中少監に(從四上) |
| 假官(品) | (兼)御史中丞(正五上) | (兼)侍御史(正六下) | (兼)御史大夫(從三) | (兼)侍御史(從六下) | (兼)御史大夫(從三) | (兼)御史中丞(正五上) | (兼)御史大夫(從三) | (兼)御史中丞(正五上) |
| 類別 | 弔祭 | 冊立 | 弔祭 | 和親 | 通好 | 修好 | 修好 | 通好 |
| 派遣先 | 新羅 | | 廻紇 | 廻紇 | 吐蕃 | 吐蕃 | 吐蕃 | 吐蕃 |
| 主 要 出 典 | ●舊199新羅傳、149歸崇敬傳●新220新羅傳●會95新羅●三國史記9新羅本紀9、惠恭王四年春●冊654奉使部・封冊三●全唐詩7、9、10、11送使詩 | | ●舊146本傳●新217回鶻傳●鑑224大曆三年七月條●冊660奉使部・絳嶺、662奉使部・絕域、980外臣部・通好 | ●新217回鶻傳●舊11代宗本紀●鑑224大曆四年五月條●全567董晉行狀 | ●新216吐蕃傳●鑑224代宗大曆六年四月條●冊654奉使部・恩獎、661奉使部・守節 | ●舊12德宗本紀、138韋倫傳、196吐蕃傳●新216吐蕃傳●鑑226大曆十四年八月條●冊652奉使部・官國威、980外臣部・通好 | ●舊12德宗本紀、196吐蕃傳●鑑226建中元年五月條、十二月條●冊662奉使部・絕域、980外臣部・通好 | ●舊12德宗本紀、196吐蕃傳下●新216吐蕃傳●鑑226、建中二年三月、十二月條●會97吐蕃●冊654奉使部・恩獎、980外臣部・通好 |
| 時期 | 代宗 | | | | | | | 德宗 |

| | | | | | | | | | |
|---------------------------|------------------|---|---|---------------------------------------|------------------|---|---|---|---|
| 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 |
| 興元元年四月 (七八四) | 興元元年二月 (七八四) | 建中四年七月 (七八三) | 建中四年二月 (七八三) | 建中三年一〇月 (七八一) | 建中三年六月 (七八一) | 建中三年五月 (七八一) | 建中三年五月 (七八一) | 建中三年五月 (七八一) | 建中三年五月 (七八一) |
| 沈房 | 于頔 | *于頔 | 李揆 | △于頔 | 樊澤 | 崔漢衡 | 李涵 | 源休 | △常魯 |
| 太常少卿(正四上) | 右散騎常侍(從三) | 司門員外郎 (從六上) | 禮部尚書より左僕 射に(從二) | 機陽主簿(正九上) | 都官員外郎 (從六上) | 殿中少監(從四上) | 光祿卿(從三) | 京兆少尹(從四下) | 不明 |
| (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)侍御史 (從六下) | (兼)御史大夫 (從三) | (攝)監察御史 (正八上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (授)鴻臚卿(從二) | (兼)散騎常侍 (從三) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)監察御史 (正八上) |
| 宣慰 | 宣慰 | 會盟 | 答禮 | 約盟 | 弔祭 | 冊立 | 冊立 | 冊立 | 冊立 |
| 吐蕃 | 吐蕃 | 吐蕃 | 吐蕃 | 吐蕃 | 吐蕃 | 廻紇 | 廻紇 | 廻紇 | 廻紇 |
| ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●陸宣公翰苑集10 | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳 | ●舊12德宗本紀、126李揆傳、156于頔傳、196吐蕃傳●鑑228建中四年七月條 | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●鑑228建中四年二月條●舊122崔漢衡傳、156于頔傳、 | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●鑑227建中三年十月條●舊122崔漢衡傳 | ●舊12德宗本紀●會98廻紇 | ●舊195廻紇傳●新217回鶻傳●鑑226建中元年六月條、227建中三年五月條 | ●舊195廻紇傳●新217回鶻傳●鑑226建中元年六月條、227建中三年五月條 | ●舊195廻紇傳●新217回鶻傳●鑑226建中元年六月條、227建中三年五月條 | ●舊195廻紇傳●新217回鶻傳●鑑226建中元年六月條、227建中三年五月條 |
| 德宗 | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | |
|--|------------------|-----------------|---|----------|---------------------------------|----------------------------|--------------------------------------|------------------|-----------------|-------|----|
| 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | No. | |
| | 貞元四年十一月 (七八八) | | 貞元三年五月 (七八七) | | 貞元三年三月 (七八七) | 貞元三年二月 (七八七) | 貞元二年二月 (七八六) | 貞元元年二月 (七八五) | 興元元年八月 (七八四) | 派遣年月 | |
| *趙憬 | 關播 | 李湛然 | △路泌 | 崔漢衡 | 李銑 | 崔潯 | 趙聿 | 孟昌源 | 周皓 | 使節 | |
| 給事中(正五上) | 刑部尚書(正三) | 殿中監より禮部尚書に(正三) | 檢校戸部郎中 (從五上) | 祕書監(從三) | 不明 | 太子右諭德より檢校左庶子(正四上) | 水部員外郎より倉部郎中に(從五上) | 祕書丞より國子司業に(從四下) | 太僕卿(從三) | 本官(品) | |
| (兼)御史中丞 | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史中丞 (正五上) | 兵部尚書(正三) | 左庶子(正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)侍御史 (從六下) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史大夫 (從三) | 假官(品) | |
| 和親冊立 | | | 會盟 | | 修好 | 修好 | 宣慰 | 冊立 | 宣慰 | 類別 | |
| 回鶻 | | | 吐蕃 | | 吐蕃 | 吐蕃 | 吐蕃 | 新羅 | 廻紇 | 派遣先 | |
| ●舊195廻紇傳●新217回鶻傳●鑑233、貞元四年十一月條●舊149張薦傳、130關播傳、138趙憬傳 | | | ●舊196吐蕃傳、12德宗本紀、122崔漢衡傳、159路泌傳●新216吐蕃傳●鑑232、貞元三年五月條●冊664奉使部・挫辱●全665與吐蕃宰相書 | | ●新216吐蕃傳●鑑232貞元三年二月條●冊980外臣部・通好 | ●舊196吐蕃傳●鑑232貞元三年二月條●會97吐蕃 | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●陸宣公翰苑集10●冊980外臣部・通好 | ●舊199新羅傳、12德宗本紀 | ●冊980外臣部・通好 | 主要出典 | |
| 德宗 | | | | | | | | | | | 時期 |

| | | | | | | | | | |
|-----------------------------|--|--|--|--|---|------------------------------------|-----------------|-------------------|-------|
| 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 | 39 | 38 | 37 |
| 貞元二〇年 | 貞元一九年六月 (八〇三) | 貞元一六年四月 (八〇〇) | 貞元一一年六月 (七九五) | 貞元一〇年六月 (七九四) | | 貞元七年五月 (七九一) | 貞元六年六月 (七九〇) | | |
| 張薦 | 薛伾 | 韋丹 | 張薦 | △崔佐 時 | 袁滋 | 庾鋌 | 郭鋒 | △張薦 | |
| 祕書少監より工部 | 右龍武大將軍 (正三) | 駕部員外郎より司 封郎中に(從五上) | 祕書少監(從四上) | 節度巡官 | 祠部郎中(從五上) | 鴻臚少卿(從四上) | 鴻臚卿(從三) | 太常博士(從七上) | |
| (兼)御史大夫 | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)監察御史 (正八上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)殿中侍御史 (從七上) | (正五上) |
| 弔祭 | 修好 | 冊立 | 冊立 | 冊立 | 冊立 | 弔祭 冊立 | 弔祭 冊立 | | |
| 吐蕃 | 吐蕃 | 新羅 | 回鶻 | 南詔 | 回鶻 | 回鶻 | 回鶻 | | |
| ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●舊149張薦傳、13 | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●鑑236貞元十九年六月條●全627代都監使奏吐蕃事宜狀●日本後紀12桓武天皇延暦二十四年六月條 | ●舊199新羅傳●新220新羅傳●三國志記10新羅本紀10・哀莊王元年●全754韋丹碑(杜牧撰) | ●舊195迴紇傳、149張薦傳●新217回鶻傳●鑑235貞元十一年五月條●全491權德輿送使文●冊662奉使部・絕域 | ●舊197南詔傳●新222南蠻傳●鑑235貞元十年六月條●蠶書3、10●冊653奉使部・稱旨、662奉使部・絕域、965外臣部・封冊●袁滋石門摩崖題名●舊185、新151袁滋傳 | ●舊195迴紇傳●新217回鶻傳●鑑233貞元七年二月條●冊965外臣部・封冊 | ●舊195迴紇傳、13德宗本紀●新217回鶻傳●冊965外臣部・封冊 | | | |
| 德宗 | | | | | | | | | |

| 55 | 54 | 53 | 52 | 51 | 50 | 49 | 48 | 47 | 46 | No. |
|--------------------------|--------------------------------|------------------------------------|---------------------|--|--|---|---|---|---------|-------|
| 元和三年一二月 (八〇八) | 元和三年五月 (八〇八) | 永貞元年一月 (八〇五) | 永貞元年一月 (八〇五) | 永貞元年二月 (八〇五) | 永貞元年二月 (八〇五) | 永貞元年二月 (八〇五) | 永貞元年二月 (八〇五) | (八〇四) | | 派遣年月 |
| 段平仲 | 柳晟 | 孫杲 | 侯幼平 | *馬于 | 元季方 | 易 | 田景度 | *呂溫 | | 使節 |
| 諫議大夫(正五上) | 山南西道節度使 | 通王府長史より鴻臚少卿に(從四上) | 衛尉少卿(從四上) | 主客員外郎 (從六上) | 兵部郎中(正五上) | 庫部員外郎 (從六上) | 左金吾衛將軍 (從三) | 左拾遺(從八上) | 侍郎(正四下) | 本官(品) |
| (兼)御史中丞 | (檢校)工部尚書 (正三) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)殿中監(從二) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)侍御史 (從六下) | (從三) | 假官(品) |
| 弔祭 | 冊立 | 冊立 | 冊立 | 告哀 | 告哀 | 告哀 | 告哀 | | | 類別 |
| 南詔 | 回鶻 | 回鶻 | 吐蕃 | 新羅 | 新羅 | 吐蕃 | 吐蕃 | | | 派遣先 |
| ●舊14憲宗本紀、167李逢吉傳●會99南詔蠻● | ●舊183柳晟傳●冊654奉使部・恩獎、965外臣部・封冊3 | ●新217回鶻傳●鑑236・永貞元年十一月條●冊980、外臣部・通好 | ●舊196吐蕃傳●冊980外臣部・通好 | ●舊199新羅傳●新220新羅傳●三國史記10新羅本紀10、哀莊王六年一月條●順宗實錄2 | ●舊199新羅傳●新220新羅傳●三國史記10新羅本紀10、哀莊王六年一月條●順宗實錄2 | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●全560所收順宗實錄2、全625所收呂溫「代孔侍郎蕃中賀順宗登極表」 | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●全560所收順宗實錄2、全625所收呂溫「代孔侍郎蕃中賀順宗登極表」 | 德宗本紀、137呂溫傳●全506張薦墓誌(權德輿撰)●冊661奉使部・守節、662奉使部・絕域 | | 主要出典 |
| 憲宗 | 憲宗 | | | 順宗 | 順宗 | | | 德宗 | | 時期 |

| | | | | | | | | |
|----------------------|------------------------------|------------------|-------------------|---|--|--|------------------------------------|----------------------------|
| 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 | 56 | 55 |
| 元和十一年五月 (八一六) | 元和七年七月 (八一二) | | 元和七年一月 (八一二) | | 元和五年七月 (八一〇) | 元和四年五月 (八〇九) | 元和四年一月 (八〇九) | (八〇八) |
| 李銳 | *李洎 | 崔廷 | 張茂宣 | *吳暈 | 李銑 | 徐復 | 武少儀 | |
| 少府少監(從四下) | 京兆府功曹 (正七下) | 職方員外郎 (從六上) | 鴻臚卿(從三) | 太子中舍人より丹 王府長史に(從四 上) | 陝州大都督府左司 馬兼通事舍人より 鴻臚少卿に(從四 上) | 祠部郎中(從五上) | 太常少卿(正四上) | |
| (攝)御史中丞 (正五上) | (兼)殿中侍御史 (從七上) | (攝)御史中丞 (正五上) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)侍御史 (從六下) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (正五上) |
| 冊立 弔祭 | 冊立 弔祭 | | 冊立 弔祭 | 修好 | | 修好 | 冊立 弔祭 | 冊立 |
| 南詔 | 新羅 | | 回鶻 | 吐蕃 | | 吐蕃 | 南詔 | |
| ●舊197南詔蠻●冊965外臣部・封冊三 | ●舊199新羅傳●新220新羅傳●冊965外臣部・封冊三 | | ●會98廻紇●冊980外臣部・通好 | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●冊980外臣部・通好●全665與吐蕃宰相尙綺心兒等書 | | ●新216吐蕃傳●白氏長慶集39與吐蕃宰相鉢闍布敕書●鑑237元和四年五月條 | ●舊197南詔蠻傳●新222南詔傳●會99南詔●冊662奉使部・絕域 | 白氏長慶集40與南詔清平官書●冊965外臣部・封冊3 |
| 憲宗 | | | | | | | | |

| No. | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 |
|-------|---|-------------------|------------------|--------------|---|------------------|------------------------------|--|--|
| 派遣年月 | 元和二年二月 (八一七) | | 元和二年四月 (八一七) | | 元和五年二月 (八一〇) | | 元和五年三月 (八一〇) | 元和五年一〇月 (八一〇) | 長慶元年四月 (八二一) |
| 使節 | 李孝誠 | *殷侑 | 烏重記 | *段鈞 | 田洎 | *張賈 | 鄭權 | 邵同 | 裴通 |
| 本官(品) | 宗正少卿(從四上) | 太常博士より虞部員外郎に(從六上) | 右衛將軍(從三) | 殿中侍御史(從七上) | 祕書少監(從四上) | 太子中允より太府少卿に(正四上) | 左金吾衛大將軍(正三) | 刻王府長史より太府少卿に(正四上) | 少府監より檢校左散騎常侍に(從三) |
| 假官(品) | (攝)御史中丞(正五上) | (兼)侍御史(從六下) | (兼)御史中丞(正五上) | (兼)御史中丞(正五上) | (兼)御史中丞(正五上) | (兼)御史中丞(正五上) | (改)左散騎常侍(從三) | (兼)御史中丞(正五上) | (兼)御史大夫(從三) |
| 類別 | 和親 | | 弔祭 | | 告哀 | | 告哀 | 修好 | 弔祭 冊立 |
| 派遣先 | 回鶻 | | 吐蕃 | | 吐蕃 | | 回鶻 | 吐蕃 | 回鶻 |
| 主要出典 | ●舊196廻紇傳●新217回鶻傳●鑑240元和十二年二月條●舊165殷侑傳●全535韓愈「送殷員外序」 | | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳 | | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●鑑241元和十五年十月條●全649授邵同充吐蕃和蕃使制。 | | ●舊162鄭權傳●冊653奉使部・稱旨662奉使部・絶域 | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●鑑241元和十五年十月條●全649授邵同充吐蕃和蕃使制、657元稹可太子左議德依前入蕃使制 | ●舊196廻紇傳●全657賈曠入回鶻副使授御史中丞賜金魚袋制、658回鶻使判官制、663裴通充回 |
| 時期 | | | | | 憲宗 | | | | 穆宗 |

| 81 | 80 | 79 | 78 | 77 | 76 | 75 | 74 | 73 | 72 |
|--|--------------|----------------|--|----------------|---------------|--|----------------------|--------------|----|
| 長慶元年一〇月 (八二二) | | | 長慶元年七月 (八二二) | | | | | | |
| △李武 | *劉師老 | 劉元鼎 | *李子鴻 | 李銳 | △殷侑 | *李憲 | 胡証 | *賈隣 | |
| 通事舍人(從六上) | 右司郎中(從五上) | 太子詹事より太理卿に(從三) | 宗正少卿(從四上) | 曹州刺史より太府卿に(從三) | 太常博士(從七上) | 光祿卿(從三) | 左金吾衛大將軍より檢校工部尙書に(正三) | 少府少監(從四下) | |
| (兼)監察御史 | (兼)御史中丞(正五上) | (兼)御史大夫(從三) | (兼)御史中丞(正五上) | (兼)御史大夫(從三) | (兼)殿中侍御史(從七上) | (兼)御史中丞(正五上)(加)御史大夫(從三) | (兼)御史大夫(從三) | (兼)御史中丞(正五上) | |
| 會盟 | | | 和親 | | | | | | |
| 吐蕃 | | | 回鶻 | | | | | | |
| 盟碑 ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●鑑242長慶元年九月條●冊660奉使部・敏辯、981外臣部・盟誓●全662劉元鼎、劉師老、李武遣使制書●唐蕃會盟碑 | | | 親2 ●舊195迴紇傳●新217回鶻傳●會98迴紇●舊16穆宗本紀、163胡証傳、133李憲傳●冊652奉使部・達王命、654奉使部・恩獎、979外臣部・和親 | | | 鶴弔祭冊立使制、666冊新回鶻可汗文、681祭回鶻可汗文●冊980外臣部・通好●唐大詔令集128 | | | |
| 穆宗 | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | |
|----------------------------|-----------------------------------|-------------------------|-----------------|------------------|----------------------|-----------------|---|------------------|-------|-------|
| 90 | 89 | 88 | 87 | 86 | 85 | 84 | 83 | 82 | 81 | No. |
| 寶曆二年十一月 | 寶曆元年九月 (八二五) | | 寶曆元年四月 (八二五) | | 長慶四年 (八二四) | 長慶三年 (八二三) | 長慶二年一〇月 (八二二) | | | 派遣年月 |
| 李銳 | 成抗 | △陳璟 夫 | *裴嘗 | 于人文 | 吳思 | 鄭權 | 杜載 | △李公 度 | | 使節 |
| 光祿卿(從三) | 岳王傳(從三) | 觀察推官より守洛陽縣丞(正八下) | 右贊善大夫 (從四下) | 蘄州刺史より司門郎中に(從五上) | 右拾遺(從八上) | 工部尚書(正三) | 太子僕より太僕少卿に(從四上) | 京兆府奉先縣丞 (正八下) | | 本官(品) |
| (兼)御史大夫 | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)監察御史 (正八上) | (兼)侍御史 (從六下) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)殿中御史 (從七上) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)監察御史 (正八上) | (正八上) | 假官(品) |
| 答禮 | 答禮 | 冊立 | | | 告哀 | 弔祭 | 答禮 | | | 類別 |
| 吐蕃 | 吐蕃 | 回鶻 | | | 吐蕃 | 回鶻 | 吐蕃 | | | 派遣先 |
| ●冊664奉使部・失指、980外臣部・通好●舊196 | ●冊664奉使部・失指、980外臣部・通好●舊196 吐蕃傳 | ●冊980外臣部・通好●鑑243寶曆元年三月條 | | | ●舊17敬宗本紀●鑑243長慶四年正月條 | ●會98廻紇 | ●新216吐蕃傳●舊196吐蕃傳●會97吐蕃●冊980外臣部・通好●唐蕃會盟碑 | | | 主要出典 |
| 敬宗 | | | | | 穆宗 | | | | | 時期 |

| 99 | 98 | 97 | 96 | 95 | 94 | 93 | 92 | 91 | 90 |
|----------------------------------|--|----------------------|----------------------------------|--------------------------------------|---|--------------------|---------------------|-------------------|------|
| 開成元年 二月 (八三九) | 太和七年 四月 (八三三) | | 太和六年 一月 (八三三) | 太和五年 一月 (八三二) | 太和五年 四月 (八三二) | 太和二年 二月 (八二八) | | (八二六) | |
| 李從簡 | * 李溶 | 唐弘實 | 田羣 | 李從易 | 源寂 | 唐弘實 | △韓漣 | * 劉幼復 | |
| 左金吾衛將軍 (從三) | 中大夫より將作少 監に(從四下) | 左驍衛將軍より金 吾將軍に(從三) | 少府少監(從四下) | 宗正少卿(從四上) | 太子左諭德 (正四下) | 棗州刺史より莒王 傳に(從二) | 萬年縣丞より大理 丞に(從六上) | 太常博士(從七上) | |
| (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)殿中侍御史 (從七上) | (兼)殿中侍御史 (從七上) | (從三) |
| 不明 | 冊立 | 弔祭 | 答禮 | 答禮 | 冊立 | 弔祭 | 答禮 | | |
| 吐蕃 | 回鶻 | | 吐蕃 | 吐蕃 | 新羅 | 吐蕃 | | | |
| ●冊664奉使部・失指●新70宗室世系表10●會 97吐蕃 | ●舊195迴紇傳●新217回鶻傳●鑑24、大和七年 四月條●冊965外臣部・封冊3●全75冊回鶻可 汗文 | | ●舊17文宗本紀、144田弘正傳附●冊980外臣 部・通好 | ●冊980外臣部・通好、662奉使部・絕域●新70 宗室世系表10 | ●舊199新羅傳●新220新羅傳●會95新羅●三國 史記10新羅本紀10●冊965外臣部・封冊3 | ●冊980外臣部・通好 | | 吐蕃傳●會97吐蕃 | |
| 文宗 | | | | | | | 敬宗 | | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|--|---|-----------------|---|------------------------------------|---------------------|---------|
| 108 | 107 | 106 | 105 | 104 | 103 | 102 | 101 | 100 | No. |
| 大中元年六月 (八四七) | 會昌五年四月 (八四五) | 會昌三年三月 (八四三) | 會昌二年二月 (八四二) | | 會昌元年二月 (八四一) | 會昌元年一月 (八四一) | 會昌元年七月 (八四一) | 開成四年三月 (八三九) | 派遣年月 |
| 李業 | 李拭 | 趙蕃 | 李璟 | *李師 偃 | 王會 | 苗續 | 金雲卿 | 李景儒 | 使節 |
| 鴻臚卿(從三) | 陝虢觀察使より右 散騎常侍に(從三) | 太僕卿(從三) | 將作少監(從四下) | 宗正少卿(從四上) | 右金吾大將軍 (正三) | 通事舍人(從六上) | (歸國新羅官・前 入新羅宣慰副使) | 太子詹事(正三) | 本官(品) |
| (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史中丞 (正五上) | (兼)御史大夫 (從三) | (兼)御史中丞 (正五上) | (可)淄州長史 (正六上) | (兼)御史中丞 (正五上) | 假官(品) |
| 冊立 | 冊立 | 宣慰 | 弔祭 | 宣慰 | | 宣慰 | 冊立 | 不明 | 類別 |
| 黠戛斯 | 黠戛斯 | 黠戛斯 | 吐蕃 | 回鶻 | | 回鶻 | 新羅 | 吐蕃 | 派遣先 |
| ●舊18宣宗本紀●新217回鶻傳附●會100結骨國 ●鑑248大中元年六月條●冊965外臣部・封冊3 | ●鑑248會昌五年四月條、六年九月條●新217回 鶻傳附●全76立黠戛斯可汗制●唐大詔令集128 ●會100結骨國 | ●新217回鶻傳附●鑑247會昌三年二月、三月條 ●全700與紇圻斯可汗書(李德裕) | ●舊196吐蕃傳●新216吐蕃傳●鑑246會昌二年十 二月條●會97吐蕃●冊980外臣部・通好 | ●鑑246會昌元年十二月條●新217回鶻傳●舊18 武宗本紀●全698遣王會等安撫回鶻制、699賜回 鶻可汗書 | | ●苗稹墓誌(墓誌・會昌031)●鑑246會昌元年十 一月條●全76遣使慰安太和公主敕 | ●舊199新羅傳●三國史記10新羅本紀11文聖王 三年秋七月條 | ●新216吐蕃傳●冊980外臣部・通好 | 主 要 出 典 |
| 宣宗 | | | 武宗 | | | | | 文宗 | 時期 |

| | | | | | |
|---|--|--|------------------|-----------------------------|----------------------|
| 114 | 113 | 112 | 111 | 110 | 109 |
| 廣明元年六月 (八八〇) | 李龜年 | 咸通六年四月 (八六五) | 胡歸厚 | 大中一〇年二 月(八五六) | 王端章 |
| *徐雲 度 | 嗣曹王 | *裴光 | 太子右諭德 (正四下) | *李潯 | 檢校祕書監より衛 尉少監(從四上) |
| 不明 | (授)宗正少卿 (從四上) | 光祿主簿(從七上) | (兼)御史中丞 (正五上) | 檢校工部郎中より 國子禮記博士(正 五上) | (兼)御史中丞 (正五上) |
| (授)大理司直 (從六上) | | (兼)監察御史 (正八上) | | (兼)御史(?) | |
| 和親 | 冊立 | 冊立 | 弔祭 | 冊立 | |
| 南詔 | 新羅 | 新羅 | | 回鶻 | |
| ●新22南詔傳●鑑23廣明元年六月條、254中和 元年八月條●桂苑筆耕集1賀通和南蠻表、2 謝示南蠻通和事宜表、6賀入蠻使廻狀 | ●三國史記11新羅本記11・景文王五年四月條 ●唐詩類苑52送胡中丞使日東(曹松) | ●舊18宣宗本紀●新27回鶻傳●鑑249大中十年 十一月條●全80遣使冊回鶻可汗詔、82冊回鶻 可汗文●唐大詔令集128、129同●敦煌掇瑣12 | | | |
| 僖宗 | 懿宗 | 懿宗 | | 宣宗 | |

凡例…【表二】武后朝～肅宗朝における對外使節の假官一覽を参照。

【表二】の一一四例は、史料に明確に記載されている肅宗朝から唐末までにおける對外使節に對する假官の事例を拾い出したものである。⁽²⁷⁾史料記載の遺漏や調査の不備などが十分に考えられるので、實際の事例はこれよりもっと多かつたはずであると想定し得るが、これによって大體唐の後半期における對外使節に對する假官の状況を把握することができると思われる。これによれば、一一四例の内には、一〇例(No. 20、21、32、33、51、54、70、101、113、114)を除いて、憲職を兼ねて出使されたのは合計一〇四例があり、全事例の九割以上を占めている。さらに玄宗朝の二例(【表二】No. 15、17)を入れると、合わせて一〇六例に上るのである。このことは對外使節の憲職への假官が玄宗朝以降における非常に一般的な現象

であったことを明瞭に物語っている。唐代の後半期においては、對外使節の憲職の假官に關する具體的な規定や制度があったか否かについて明確な記載は見當たらないが、少なくとも遣使の際の慣行として、憲職への假官がよく行われていたと言えよう。

【表二】から次のことに特に注目したい。

第一、唐代中後期において對外使節は普遍的に憲職を兼ねていたものの、假授された憲職の位階は、對外使節の本官の位階より低く、あるいは使節の本官の位階と同じであったケースがよく見られる。

例えば、【表二】に見られる從二品の左僕射（No. 24）・正三品の六部の尙書（No. 9、35、36、74、84）・太常卿（No. 16）・左右衛大將軍（No. 45、103）などの本官をもつて從三品の御史大夫を兼ねたことや、正三品の太子詹事（No. 100）・從三品の鴻臚卿（No. 108）・光祿卿（No. 75）・太僕卿（No. 106）・右散騎常侍（No. 107）・左金吾衛將軍（No. 48、99）・右衛將軍（No. 66）・親王傳（No. 89）、正四品の太子左庶子（No. 6）・太子左右諭德（No. 31、94、111）・太常少卿（No. 15、27、56）・從四品の諸寺の少卿（No. 8、17、29、43、52、53、63、64、68、69、71、73、78、83、95、96、98、104、105、109）・京兆少尹（No. 19）などの本官で正五品上の御史中丞を兼ねたことが目立っているほかは、從四品の太子中舍人（No. 59）・右贊善大夫（No. 87）、從五品の六部郎中（No. 13、30）などの本官で從六品下の侍御史を兼ねたことや、從六品上の大理丞（No. 92）、正七品下の京兆府功曹（No. 62）の本官で從七品上の殿中侍御史を兼ねたこと、および從六品上の通事舍人（No. 81）という本官で正八品上の監察御史を兼ねたことは、いずれも高い位階の本官をもつて低い位階の憲職を兼ねる事例である。また、本官と假官の位階が同じである事例としては、No. 1、4、5、7、12、26、28、38、39、55、60、72、75、76、77、79、90、91、93、97などが挙げられる。要するに、假官ポストである憲職の位階が使節の本官の位階より低く、あるいは同じである事例は、憲職の假官の全事例の約七割を占めているのである。

この現象は、第二節に述べた唐の前半期における對外使節の鴻臚職の假官とは對照的である。對外使節の官品を上げる

という目的をもつ鴻臚職の假官と異なつて、對外使節の憲職の假官は明らかに使節の官品を上げることが主な目的ではないようである。それでは、なぜ對外使節が憲職を兼ねるのか。

對外使節の憲職の假官のもつ意味について言えば、御史臺の役割に觸れなければならない。周知のとおり、唐の龐大な官僚機構のうちに、天子直屬の御史臺は強い権限を持っていたのである。朝廷の刑憲や邦國の紀綱を掌つて、不正非違を監察糾弾するために、御史大夫・御史中丞をはじめとする御史臺の官僚——すなわち憲官は常に兩都および各地を巡按し、官僚の不正を糾弾するほか、監軍敕使として各地の武將達の動向を監察彈劾するのである。このような御史出使の制は唐初以來に普遍的に行われて、その威勢が「山岳を揺り動かし、州縣を震え上がらせる」程であつたと記載されている⁽²⁸⁾。唐の中期以降の使職の發達に伴い、御史臺の官職は令外官たる使職の主な「寄祿官」（俸祿を支給する職事官）となつていた。柳宗元が論じているように、諸使の憲官兼任が原因となつて使職の威勢が盛んになり權威を強化することができた。貞元年間の張⁽²⁹⁾_{（29）}_{（29）}わけである。従つて、唐の中期以降における對外使節も普遍的に御史臺の官職を兼ねるようになってきた。貞元年間の張薦という人物が、それぞれ使節團の判官・大使として回鶻と吐蕃に派遣され、「三使絕域、皆兼憲職」（三回到絶域に出使して、すべて憲職を兼任していた⁽³⁰⁾）、すなわち【表二】のNo. 38（貞元四年に殿中侍御史を兼ねて回鶻に出使）、No. 43（貞元十一年に御史中丞を兼ねて回鶻に出使）、No. 46（貞元二〇年に御史大夫を兼ねて吐蕃に出使）⁽³¹⁾がその典型的な事例である。また、使節の憲職假官が使節の權威を強化するための皇帝の特別な恩寵であつたといふことについては、對外使節を任命する辭令にも見られ、前節に觸れた【表一】⁽³²⁾ No. 15 遣吐蕃大使である鴻臚卿崔琳への辭令や、【表二】⁽³¹⁾ No. 73 の遣回鶻使節團の副使である少府少監賈隣への辭令などがいずれも好例である。

要するに、對外使節の憲職の假官は、官品の向上というよりも、むしろ主に憲職の權威を借用して使節の地位を強化することを狙つていたと言える。これも唐代の後半期における對外使節の假官の最大の特色とも言えよう。

第二、憲職を假授された對外使節の諸本官ポストのうちには、外交官たる鴻臚卿・少卿および散騎常侍を有するものが

あるのが興味深い。

前に述べたように、隋の時代や唐の前半期において、出使を本務とする散騎常侍、および鴻臚卿をはじめとする鴻臚の職が、よく對外使節の假官ポストとして使節に假授されていたが、しかし、玄宗朝以降においては、對外使節として派遣される時、散騎常侍と鴻臚職を本官とする者に對しても必ず憲職を假授されるようになった。例えば、【表一】に見られる開元一九年（七三二）に鴻臚卿である崔琳が吐蕃へ（No.15）、【表二】に見られる寶應元年（七六二）に左散騎常侍である尙衡が廻紇へ（No.4）、廣德元年（七六三）に左散騎常侍である李之芳が吐蕃へ（No.5）、左散騎常侍である王翊が廻紇へ（No.7）、大曆三年（七六八）に左散騎常侍である蕭昕が廻紇へ（No.12）、興元元年（七八四）に右散騎常侍である于頔が吐蕃へ（No.26）、貞元六年（七九〇）に鴻臚卿である郭鋒が回鶻（廻紇）へ（No.39）、翌年に鴻臚少卿である庾鋌が回鶻（廻紇）へ（No.40）、元和五年（八一〇）に鴻臚少卿である李錡が吐蕃へ（No.58）、元和七年（八二二）に鴻臚卿である張茂宣が回鶻（廻紇）へ（No.60）、會昌五年（八四五）に右散騎常侍である李拭が黠戛斯へ（No.107）、大中元年（八四七）に鴻臚卿である李業が黠戛斯へ（No.108）派遣された時は、いずれも御史大夫または御史中丞を假授されたのである。

この現象は、唐の中後期に入ると、散騎常侍と鴻臚の職などの從來の假官ポストは、完全に憲職の諸ポストに取って代わられたことを示している。肅宗の乾元元年（七五八）に、遣廻紇使節團の副使である兵部郎中の李巽が同時に御史中丞と鴻臚卿を攝することは、その移行期の象徴ではなからうかと考えられる。

第三、【表二】から見れば、憲職を假授された諸對外使節のうちに、唐代の中後期において對外使節として活躍していた中使（内使ともいう。宦官による使節）の姿が殆ど見られないことも注目に値する現象である。

周知のように、唐代の中後期においては、内侍省の宦官（中官）達は中使（内使）として、様々な使者に充てられて唐の政界において重要な役目を演じていたのである。筆者の統計によれば、玄宗朝から唐末までに内侍・内常侍・内給事などの宦官による中使が對外使節として派遣されたのは延べ四二回に上り、頻度が異常に高かったと見られる。⁽³³⁾ところが、

このような風潮のなかで、なぜ中使だけが憲職を假授されていなかったのか。その原因について言えば、主に唐の中期以降における政局の動向とりわけ政治勢力の消長と関係があったのではないかと考えられる。

唐代における御史臺の役割と肅正の官としての威勢については既述した通りであるが、しかし、唐中期以後、宦官集團の勃興によって、憲官たる御史臺の一部分の權限が實際に宦官に取って代わられるようになった。各地への巡察、藩鎮への監軍、域外への出使などの方面では、御史臺の官僚のかわりに、中使が次第に主役を演じるようになってきた。御史の出使巡察の際に、館宿の位次などを巡って、中使とのトラブルもしばしば起こっていたと見られる。⁽³⁴⁾言うまでもなくこれは、天子の側近のなかの側近として中使の威勢と實際の權力が御史を凌駕していたのを物語る。要するに、宦官の特殊な地位のほかに、唐の中期以降において天子が君主權を強化するため、大量に側近の宦官を重用し宦官集團の臺頭と專横をもたらしってきたというような背景が、中使の出使の際に憲職を兼ねない主要な原因ではないかと考えられる。こういった背景のなかで、ほかの官僚が對外使節として派遣される場合は必ず御史臺の官職を借用して自身の權威を強化していたにもかかわらず、中使だけが對外使節として派遣されても憲職を兼ねていなかったのであろう。

第四、**〔表二〕**から見れば、對外使節團の大使だけではなくて、使節團の副使や判官などの僚屬にも憲職が假授されていたのである。使節團の構成員には、それぞれのようなランクの假官ポストを與えられたのかということを通じて、唐代中後期における對外使節の憲職假官の制の一端を窺えるので、ここでは副使と判官の憲職假官の状況を少し見ておこう。唐代の史料に明確に記載されている副使と判官の憲職假官の事例を拾ってみると、三三例に上った**〔表二〕**で*印が附いたのは副使、△印が附いたのは判官。この三三例の内譯を見ると、副使の二二例のうち、假官ポストは御史中丞が一二人（No. 2、6、37、49、67、69、73、75、78、80、98、104）、侍御史が七人（No. 11、25、47、59、62、65、87）、監察御史が一人（No. 112）、**〔御史〕**が一人（No. 110）であり、判官の一一例のうち、監察御史が六人（No. 18、23、42、81、82、88）、殿中侍御史が三人（No. 38、76、92）、侍御史が一人（No. 13）、御史中丞が一人（No. 34）であった。

これによれば、大使は殆ど從三品の御史大夫を假授されたのに對し、副使に假授されたのは殆ど正五品上の御史中丞、次は從六品下の侍御史であり、判官については、從七品上の殿中侍御史と正八品上の監察御史がその大半を占めたことがわかる。

この點については、大使・副使・判官の名前が全て分かる使節團を例にして絞って見れば一目瞭然である。例えば、貞元四年（七八八）の遣回鶻和親冊立使節團の場合は、婚禮使兼大使である李湛然と冊立大使の關播がそれぞれ御史大夫を假授されたのに對し、副使の趙憬が御史中丞、判官の張薦が殿中侍御史を假授されたこと（No. 35—38）、長慶元年（八二一）の遣回鶻使節團の場合は、大使の胡証が御史大夫、副使の李憲が御史中丞、判官の殷侗が殿中侍御史を假授された（No. 74—76）こと、および同年に吐蕃に派遣された會盟使節團の場合は、大使の劉元鼎が御史大夫、副使の劉師老が御史中丞、二人の判官である李武と李公度がそれぞれ監察御史を假授された（No. 79—82）ことがいづれも好例である。

四 對外使節の假官の性格と賜紫緋魚袋

隋唐時代における對外使節の假官の主な様態について上述の通りであるが、本節では、こういった假官の性格について觸れてみる上で、更に對外使節の假官と密接な關連がある使節に對する賜紫緋魚袋の實態について考察してみたい。

〔四の一〕

對外使節の假官の性格については、すでに本稿の冒頭に述べたとおり、假・攝・兼・檢校・加などの表現で示されているように、對外使節達に散騎常侍・鴻臚寺の官職や御史臺の官職を帶びさせるということは、ただ一時的な假授であつたにすぎない。日本遣唐使の借位が日本國內における敘位進級とは全然關係がないのと同様に、⁽³⁵⁾隋唐王朝の對外使節の假官の資格もただ出使期間中に限られ、國內での昇進とはあまり關係がなかったようである。

この点については、隋代の光祿少卿である柳奢之が散騎常侍（從三品）を兼ねて吐谷渾と突厥に出使し、歸朝後に正四品の地方の肅州と息州刺史に任命されたことは前述の通りであるほか、唐代における對外使節の出使時の假官の官品と出使後に遷された官職の官品を比較してみると一目瞭然である。史料に見られる實例を拾ってみると、例えば、

- A. 高祖の武德九年（六二六）と太宗の貞觀元年（六二七）頃、國子助教の朱子奢が員外散騎侍郎（從五品下）に假授されて朝鮮三國に出使し、歸國後に國子學の無任所の散官に遷された。⁽³⁶⁾
- B. 武后朝の神功元年（六九七）、左衛郎將の田歸道が司賓卿（從三品）を攝して突厥に出使し、歸朝後に正四品上の夏官侍郎（兵部侍郎）に遷された。⁽³⁷⁾
- C. 睿宗の景雲二年（七一）、御史中丞の和逢堯が鴻臚卿（從三品）を攝し、突厥に出使し、歸朝後に正四品下の戸部侍郎に遷された。⁽³⁸⁾
- D. 代宗の大曆三年（七六八）、倉部郎中の歸崇敬が御史中丞（正五品上）を兼ねて新羅に出使し、歸朝後に從四品下の國子司業に遷された。⁽³⁹⁾
- E. 德宗の建中三年（七八二）、都官員外郎の樊澤が御史中丞（正五品上）を兼ねて吐蕃に行つて、歸朝後に從五品上の倉部郎中に遷された。⁽⁴⁰⁾
- F. 德宗の貞元四年（七八八）、刑部尚書の關播が御史大夫（從三品）を兼ねて回鶻に出使し、歸命後に兵部尚書（正三品）に遷された。⁽⁴¹⁾
- G. 德宗の貞元一〇年（七九四）、祠部郎中の袁滋が御史中丞（正五品上）を兼ねて南詔に出使した後、正五品上の諫議大夫に遷された。⁽⁴²⁾
- H. 穆宗の長慶元年（八二）、左金吾衛大將軍・檢校工部尚書の胡証が御史大夫（從三品）を兼ねて回鶻に出使し、歸朝後に正四品下の工部侍郎に遷された。⁽⁴³⁾

上述した事例を見て分かるように、使節の歸朝後に任命された官職の大半は、出使時の假官ポストの官品よりランクが低いのである。事例DとFについては、歸朝後に昇進されたと見られるが、むしろ特例である。⁽⁴⁴⁾要するに、出使時に假授された官職は外國に對する使節の身分を示すものだけであつて、國內における官職の昇進には殆ど意味を持たないと言えよう。

〔四の二〕

次には、假官と密接な關連がある對外使節に對する賜紫緋魚袋の實態を見ておこう。

唐制には、文武百官の服色に關する嚴格な規定があり、唐初の貞觀四年（六三〇）八月一日の詔敕に、

三品以上は紫の服、四品・五品以上は緋の服、六品と七品は綠の服、八品と九品は青の服を着る。⁽⁴⁵⁾（三品已上服紫、四品五品已上服緋、六品七品以綠、八品九品以青。）

とあり、また、上元元年（六七四）八月二日の詔敕には更に、

文武三品以上は紫の服、四品は濃い緋の服、五品は薄い緋の服、六品は濃い綠の服、七品は薄い綠の服、八品は濃い青の服、九品は薄い青の服を着る。⁽⁴⁶⁾（文武三品已上服紫、……四品服深緋、……五品服淺緋、……六品服深綠、七品服淺綠、……八品服深青、……九品服淺青。）

と詳しく規定されている。即ち官品によつて官人の常服の色が異なり、大雑把に言えば、三品以上の官人の服色は紫であり、四品と五品の服色は緋であり、六品と七品の服色は綠であり、八品と九品の服色は青である。⁽⁴⁷⁾

ところが、唐代の中後期に入ると、令外の官たる使職の發生や散官の地位の轉落、および臨時的な必要に應じる等の原因によつて、官職と官品の間に不具合が起こり、官人の服色制度が混亂したのである。その背景の下で官職と官品の不統一を解決するために、上位の官人の服色を、本來は着用の資格を持つていない者に賜るといふことが唐代の中後期におい

て盛んに行われるようになった。これは即ち唐代の文獻によく見られる「賜紫」「賜緋」および「賜綠」である。その内、一般の官僚たちに對しては、五品以上の官人の服色である「紫」と「緋」の下賜または借用、即ち「賜紫」と「賜緋」あるいは「借紫」と「借緋」が一目立っているのである。⁽⁴⁸⁾

また、唐代から用い始めた魚袋（官人の身分の貴賤を示す魚符を入れた袋）については、『唐會要』⁽⁴⁹⁾と『唐六典』⁽⁵⁰⁾の記載によれば、五品以上の官人だけに隨身魚袋が給せられ、そのうち、三品以上（著紫）は金魚袋、四・五品（著緋）は銀魚袋となったのである。⁽⁵¹⁾ 上述した「賜紫緋」と同じ原因で、金魚袋と銀魚袋を、本來は着用資格を持っていない者に賜るということも唐代の中後期において盛んに行われるようになった。

このような紫、緋の服色および日常携行している身分證明書のようなものである金・銀魚袋は官吏の身分地位を示す唯一の可視的標識であるから、一國を代表する對外使節に對しては、いうまでもなく特に重要な意味を持つのである。唐代の中後期においては、對外使節に對する賜紫緋魚袋も頻繁に行われていたようであり、唐代文獻に見られる對外使節に關する賜紫緋魚袋の事例を拾ってみると、明確に記載されているのは次の數例がある。

A. 大曆三年（七六八）二月、遣新羅使節團大使の歸崇敬（本官は從五品上の倉部郎中、假官は正五品上の御史中丞）〔表二〕
No. 10 參照）↓「賜紫金魚袋」⁽⁵²⁾。

B. 大曆四年（七六九）六月、遣回鶻使節團判官の董晉（本官は從五品上の祠部郎中、假官は從六品下の侍御史）〔表二〕
參照）↓「賜紫金魚袋」⁽⁵³⁾。

C. 貞元一六年（八〇〇）四月、遣新羅使節團大使の韋丹（本官は從五品上の司封郎中、假官は正五品上の御史中丞）〔表二〕
No. 44 參照）↓「章服金紫」（＝賜紫金魚袋）⁽⁵⁴⁾。

D. 貞元二〇年（八〇四）五月、遣吐蕃使節團副使の呂溫（本官は從八品上の左拾遺、假官は從六品下の侍御史）〔表二〕
參照）↓「賜緋袍牙笏」（＝賜緋銀魚袋）⁽⁵⁵⁾。

- E. 元和五年（八一〇）七月、遣吐蕃使節團大使の李銛（本官は從四品上の鴻臚少卿、假官は正五品上の御史中丞）〔表二〕No. 58 參照〕↓「賜紫金魚袋」⁽⁵⁶⁾。
- F. 元和十二年（八一七）二月、遣回鵠使節團副使の殷侑（本官は從六品上の虔部員外郎、假官は從六品下の侍御史）〔表二〕No. 65 參照〕↓「朱衣象笏」（＝賜緋銀魚袋⁽⁵⁷⁾）。
- G. 長慶元年（八二二）四月、遣回鵠使節團副使の賈隣（本官は從四品下の少府少監、假官は正五品上の御史中丞）〔表二〕No. 73 參照〕↓「賜紫金魚袋」⁽⁵⁸⁾。
- H. 長慶二年（八二三）一〇月、遣吐蕃使節團大使の杜載（本官は從四品上の太僕少卿、假官は正五品上の御史中丞）〔表二〕No. 83 參照〕↓「仍賜金紫」（＝賜紫金魚袋⁽⁵⁹⁾）。
- I. 寶曆元年（八二五）四月、遣回鵠使節團大使の于人文（本官は從五品上の司門郎中、假官は正五品上の御史中丞）と判官の陳璟夫（本官は從八品下の守洛陽縣丞、假官は正八品上の監察御史）〔表二〕No. 86、88 參照〕↓それぞれ「賜紫金魚袋」・「賜緋魚袋」⁽⁶⁰⁾。
- J. 寶曆元年（八二五）九月・十一月、遣吐蕃使節團大使の成抗（本官は從三品の岳王傳、假官は正五品上の御史中丞）、副使の劉幼復（本官は從七品上の太常博士、假官は從七品上の殿中侍御史）、判官の韓漸（本官は從六品上の大理丞、假官は從七品上の殿中侍御史）〔表二〕No. 89、91、92 參照〕↓それぞれ「賜紫金魚袋」・「賜緋魚袋」・「賜緋魚袋」⁽⁶¹⁾。
- K. 太和五年（八三一）十一月、遣吐蕃使節團大使の李從易（本官は從四品上の宗正少卿、假官は正五品上の御史中丞）〔表二〕No. 95 參照〕↓「賜紫金魚袋」⁽⁶²⁾。
- L. 太和六年（八三二）十一月、遣吐蕃使節團大使の田羣（本官は從四品下の少府少監、假官は正五品上の御史中丞）〔表二〕No. 96 參照〕↓「賜紫金袋」（＝賜紫金魚袋⁽⁶³⁾）。
- M. 太和七年（八三三）四月、遣回鵠使節團大使の唐弘實（本官は從三品の金吾將軍、假官は從三品の御史大夫）と副使の李

溶（本官は從四品下の將作少監、假官は正五品上の御史中丞）〔表二〕No. 97、98 参照〕↓それぞれ「賜紫金魚袋」⁽⁶⁴⁾

N. 太和七年（八三三）秋、遣渤海使の張建章（幽州節度府による遣使）（本官は節度府の僚佐である幽州行軍司馬）↓「朱衣使行」（＝賜緋魚袋？）⁽⁶⁵⁾

O. 會昌元年（八四二）七月、遣回鶻使節團大使の苗續（本官は從六品上の通事舍人、假官は正五品上の御史中丞）〔表二〕No. 102 参照〕↓「服三品衣魚」（＝賜紫金魚袋）⁽⁶⁶⁾

P. 大中一〇年（八五六）十一月、遣回鶻使節團大使の王端章（本官は從四品上の衛尉少監、假官は正五品上の御史中丞）と副使の李潯（本官は正五品上の國子禮記博士、假官は「御史」）〔表二〕No. 109、110 参照〕↓それぞれ「賜紫金魚袋」・「賜緋魚袋」⁽⁶⁷⁾

上掲した事例から見れば、出使の際に與えられた、對外使節に對する賜紫金魚袋は全て唐の後半期に集中している。その内、賜緋魚袋の五人（事例 D、I、J、P）と賜緋と思われる「朱衣」で出使される二人（事例 F、N）に對し、賜紫金魚袋の者は十五人に上って、全體の三分の二以上を占めている。言い換えれば、多くの使節が出使される前に、三品以上の位階の標識である紫の官服と金魚袋を賜ったのである。

ところが、使節の本官および假官ポストの位階を観察してみると、一つの現象が注目される。すなわち、紫金魚袋を賜った使節のうち、寶曆元年（八二五）の遣吐蕃使節團大使の成抗（事例 J）と太和七年（八三三）の遣回鶻使節團大使の唐弘實（事例 M）を除いて、殆どの使節が本官・假官共に四―六品の位階であるにもかかわらず、紫金魚袋という三品以上の官人の身分標識を與えられ、本官・假官の位階と紫金魚袋に示される位階の間に大きな格差が見られる。

上述した事例の中では、大曆三年（七六八）二月に遣新羅使節團大使の歸崇敬が從五品上の倉部郎中という本官と正五品上の御史中丞の假官で、三品以上の標識である紫金魚袋を賜ったこと（事例 A）以下、殆どは四―六品の本官で紫金魚袋を與えられたのである。例えば本官の位階ランクを順番に見てみると、正五品上の御史中丞を兼攝する事例 E の李錡

(從四品上の鴻臚少卿)、Hの杜載(從四品上の太僕少卿)、Kの李從易(從四品上の宗正少卿)、Pの王端章(從四品上の衛尉少監)、Gの賈磷(從四品下の少府少監)、Lの田羣(從四品下の少府少監)、Mの李溶(從四品下の將作少監)、Bの董晉(從五品上の祠部郎中)、Cの韋丹(從五品上の司封郎中)、Iの于人文(從五品上の司門郎中) 達がいずれも紫金魚袋を賜ったのである。とりわけ事例Oの苗縝が遣回鵠使節團の大使として、從六品上の通事舍人という本官と御史中丞という假官で「服三品衣魚」―すなわち三品の服色である紫衣と金魚袋を着用して出使することはきわめて目立っている。というのは苗縝の本官の位階と與えられた出使時の服色の位階の間とは十階以上の格差が見られるからである。

賜緋魚袋の場合も同じであり、事例Pの遣回鵠使節團の副使である李潯(正五品上の國子禮記博士)を除いて、殆どは七・八品の本官で緋魚袋という四・五品の官人の身分標識を與えられたのである。例えば、事例Dの遣吐蕃使節團副使の呂溫(從八品上の左拾遺)、Iの遣回鵠使節團判官の陳璟夫(從八品下の守洛陽縣丞)、Jの遣吐蕃使節團大使副使の劉幼復(從七品上の殿中侍御史) がいずれも好例である。

こういったような異常な格差から考えれば、對外使節に對する賜紫金魚袋は「賜」という表現にもかかわらず、その實質としては、やはり一時的な借授ではないかと思われる。本稿の冒頭に觸れたが、對外使節に對する借紫、借緋という制度が唐制にもみえる。『唐會要』卷三十一「與服」上の「内外官章服」條に載せられている開元四年(七二六)二月二三日の詔敕には、明確に、

施行されている服色は貴賤を區別するので、僭越や濫れが許されない。……また入蕃使の場合は、別の詔敕で借紫・借緋されている者には、使命が終わると停止すべきである。今後は衙内で殿中侍御史に一任してこれを取り締まる。

(彰施服色、分別貴賤、苟容僭濫。(中略) 又入蕃使、別敕借緋紫者、使回合停。自今以後、衙内宜專定殿中侍御史糾察。)

とある。これと同一内容の記事が『冊府元龜』卷六三にも見られる。この記載によれば、入蕃使(對外使節)に紫、緋を

借授することは、少なくとも開元四年以前に既に存在⁽⁶⁸⁾、しかも開元四年二月二三日から、借授された紫、緋については「使回合停」であって、つまり、使命を完うして歸國することによって失効すべきであり、朝廷に返納しなければならぬと規定されているのである。

この借紫緋の制はいつまで存続していたかについては明確な記載を見出し得ないが、上述した唐の後半期に盛んに行われていた使節に對する賜紫緋とは無關係ではないと思う。前に述べた事例から明らかなように、賜紫緋とは、出使等の特別の事情で、一時的に官品の及ばぬ者に對して特に制限を設けず紫緋の着用を許すものであり、いわば借紫緋と全く同じである。一般的に言えば、「借」と「賜」の表現は異なつて、借りるものが返さなければいけないのに對し、賜るものは返納しなくてもいいが、しかし、唐の後半期における使節に對する假官と使節の歸國後の遷官狀況（本節〔四の二〕參照）や前述した賜紫緋魚袋の様子、とりわけ各々の本官と服色との異常な格差および「服三品衣魚、往存撫之」⁽⁶⁹⁾、「朱衣象笏、承命以行」や「假幽州司馬、朱衣使行」⁽⁷⁰⁾などの表現を併せて總合的に見れば、賜っていた紫・緋色の官服と金・銀の魚袋は、前述した假官ポストと同様に、使節の奉使期間中だけに有効になるものであらう。言い換えれば、それは「賜」よりも「借」と言うべきであり、使節に對する借位にあたるものと言えよう。

おわりに

以上、隋唐時代における對外使節の假官および賜紫緋魚袋の實態について考察してきたが、まとめてみると、隋唐時代において對外使節の假官と借位は大體次の動向を呈しているようである。

隋代の場合は、前期の文帝期において對外使節に對する假官は從三品の散騎常侍を中心にしていたのに對し、後期の煬帝朝における假官の實態は殆ど不明である。ところが、諸史料における遣倭國使裴世清の官職に關する異なる記述から推察すれば、後期においては、鴻臚寺の職が使節に假授されたことがあるようである。

唐代に入ると、最初は對外使節に散騎常侍を假授される事例があったが、武后朝から玄宗朝にかけての間に、假官ポストは次第に外交官たる鴻臚の職（鴻臚卿や鴻臚少卿）に固定されてきたと見られる。この間には殆どの對外使節が假、攝、檢校の形で鴻臚卿や少卿を帯びて外國に遣わされていたのである。これは唐代の前半期における使節假官の主な特色とも言える。

ところが、玄宗朝以降、對外使節の假官ポストは一變して、憲官たる御史臺の諸官職（憲職）が中心になっていたのである。中使を除いて殆どの對外使節（使節團の僚佐を含む）は憲職を兼ね、隋代と唐の前半期における常に假官ポストとされていた散騎常侍・鴻臚職を本官とする對外使節でも、必ず憲職を兼ねるようになった。しかも對外使節の本官の位階が假官ポストである憲官の位階より高いということからみれば、明らかに使節の憲官への假官は、位階の向上を主な目的とするのではなく、憲官の威勢を借用して使節の權威を強化するのを狙っていたのであろう。この點は唐の後半期における對外使節の假官についての最も重要な特徴であると言ってよい。

また、歸國後の官職の遷轉（異動）状況からみれば、對外使節の假官は、あくまでも出使のための一時的な措置にすぎず、國內における異動とは無關係であり、いったん歸國すると、それも當然に失効するのである。

一方、假官と共に、對外使節に對する賜紫緋魚袋も行われていた。文獻にみえる事例がすべて唐の後半期に集中しているが、これは開元令に見える使節に對する借紫・借緋の制の繼續ではなからうかと考えられる。言い換えれば、賜った紫緋魚袋で示される位階と使節の本官の位階との異常な格差などから考えれば、この賜紫緋魚袋の制は、假官と同じように、使節の地位を上げるために出使期間中にのみ有効である借位にあたるものであろうと思われる。

要するに、對外使節の假官と借位は、いずれも出使のために一時的に與えられる資格にすぎず、その有効な期間は使節の在任中に限られる。一方、假官と借位で示されるものは派遣先に對する身分表示の機能を持つから、それを通じてさらに使節の本官を合わせて検討すれば、隋唐王朝の國際意識および古代東アジアの國際關係の一端を窺えるので、今後の課

註

- (1) 『唐會要』卷三二「輿服」上「内外官章服」條、開元四年(七二六)二月三日詔敕。又は『冊府元龜』卷六三を參照。
- (2) 大庭脩「唐元和元年高階真人遠成告身について——遣唐使の告身と位記」關西大學『東西學術研究所論叢』四一(一九六〇年三月)、のち同氏『古代中世における日中關係史の研究』(同朋舎、一九九六年二月)加筆再録。
- (3) 河合ミツ「借緋に關する覺え書」(『續日本紀研究』一三二號、一九八四年)。
- (4) 加藤順一「借位の起源とその機能——對外使節を中心として——」(慶應義塾大學『法學研究』六四卷第一號、一九九一年一月)。
- (5) 石曉軍『隋唐外務官僚の研究』下編の第二章第二章(關西大學博士論文、一九九七年三月)を參照。本稿はそれを大幅に加筆修訂したものである。
- (6) 『隋書』卷四七「柳謩之傳」、または『冊府元龜』卷六六二「奉使部・絕域」。
- (7) (開皇元年)十一月、(中略)丁卯、遣兼散騎侍郎鄭瑒使於陳。『隋書』卷一「高祖本紀」。以下同。
- (8) (開皇三年)夏四月、(中略)辛卯、遣兼散騎常侍薛舒、兼通直散騎常侍王劼使於陳。
- (9) (開皇三年)閏十二月乙卯、遣兼散騎常侍曹令則、通直散騎常侍魏澹使於陳。
- (10) (開皇四年)冬十一月壬戌、遣兼散騎常侍薛道衡、通直散騎常侍豆盧寔使於陳。
- (11) (開皇五年)九月、(中略)丙子、遣兼散騎常侍李若、通直散騎常侍崔君瞻使於陳。
- (12) (開皇六年)八月辛卯、(中略)遣散騎常侍裴豪、通直散騎常侍劉顥聘于陳。
- (13) (開皇七年)夏四月、(中略)甲戌、遣散騎常侍楊同、兼通直散騎常侍崔儼使于陳。
- (14) (開皇八年)三月、(中略)甲戌、遣兼散騎常侍程尙賢、兼通直散騎常侍韋暉使于陳。
- (15) 『隋書』卷一「高祖本紀」、又は『資治通鑑』卷一七六・陳紀一〇を參照。
- (16) 『隋書』卷二八「百官志」下の門下省の條に「(散騎常侍、通直散騎常侍)……兼出使勞問」とある。
- (17) 増村宏「隋書と書紀推古紀」(鹿兒島大學法文學部研究紀要・文學科論集』四・五號、一九六八年十一月、一九六九年十二月)。のち同氏「遣唐使の研究」(同朋舎、一九八六)再録、第三章、第一一九頁。
- (18) 池田溫「裴世清と高表仁——隋唐と倭の交渉の一面

——「〔日本歴史〕二八〇號 一九七一年九月」。のち同氏『東アジアの文化交流史』(吉川弘文館、二〇〇二年三月)加筆再録、第一部第三章。

- (19) 「朱子奢、蘇州吳人也。……武德四年、授國子助教。貞觀初、高麗、百濟同伐新羅、連兵數年不解、新羅遣使告急。乃假子奢員外散騎侍郎充使、喻可以釋三國之憾、雅有儀觀、東夷大欽敬之、三國王皆上表謝罪、賜遣甚厚。」(『舊唐書』一八九上「朱子奢傳」)。また『舊唐書』一八九上「高麗傳」「新羅傳」「百濟傳」、『新唐書』卷二二〇「新羅傳」、『三國史記』卷四「新羅本紀」四・眞平王四十八年七月條、卷二〇「高句麗本紀」八・榮留王九年條、卷二七「百濟本紀」五・武王二十七年條を参照。

- (20) 『舊唐書』一八九上「新羅傳」、『新唐書』卷二二〇「新羅傳」、『三國史記』四「新羅本紀」四・眞平王四十三年七月條を参照。

- (21) この度の遣使について唐の太宗は「一介之使、而領表遂安、勝十萬之師」と言っている。(『新唐書』卷二二下「南蠻傳」下「南平獠」)、『資治通鑑』卷一九二・貞觀元年十月條を参照。

- (22) 「乾元元年」秋七月丁亥、詔以幼女封爲寧國公主出降。其降蕃日、仍以堂弟漢中郡王瑒爲特進、試太常卿、攝御史大夫、充册命英武威遠毗伽可汗使、以堂姪左司郎中巽爲兵部郎中、攝御史中丞、鴻臚卿、副之。兼充寧國公主禮會使。」(『舊唐書』卷一九五「廻紇傳」)。この点については、石曉軍「唐代における對外使節團の組織について」(『姫路

獨協大學外國語學部紀要』第一五號、二〇〇二年一月)を参照。

- (23) 『舊唐書』卷一九六「吐蕃傳」。
- (24) 『新唐書』卷二二七「回鶻傳」。『冊府元龜』卷九八〇「外臣部・通好」。
- (25) 『舊唐書』卷一九六「吐蕃傳」。『冊府元龜』卷九八〇「外臣部・通好」。
- (26) 「若諸蕃大會渠有封建禮命、則受册而往其國。」(『唐六典』卷一八「鴻臚寺」)。
- (27) 前掲拙稿『隋唐外務官僚の研究』下編の附録四「唐代遣外使節一覽表」(關西大學博士論文、一九九七年三月)を参照。

- (28) 「御史銜命出使、不能動搖山岳、震懾州縣、誠曠職耳!」(『唐會要』卷六三「御史臺」下「出使」)。

- (29) 「古者交政於四方。謂之使。今之制、受命臨戎、職無所統屬者、亦謂之使。凡使之號、蓋專焉而行其道也。開元以來、其制愈重、故取御史之名而加焉。至於今若干年、其兼中丞者若干人。其使絕域、統兵戎、按州郡、專食貨。而柔遠人、固王略、齊風俗、和關石。大者戡復於內、拓定於外、皆得以壯其威、張其聲、其用遠矣。假是名以莅厥職、而尊嚴若是。」(柳宗元「諸使兼御史中丞廳壁記」、『柳宗元集』卷二六。又は『全唐文』卷五八〇)を参照。(傍線は引用者による。以下同)。

- (30) 『舊唐書』卷一四九「張薦傳」。

- (31) 「詔曰。鴻臚卿崔琳、(中略)宜令持節引入吐蕃、使所

- 司準式發遣、又以琳爲御史大夫、以奉使人蕃、寵之也。」
 (『冊府元龜』卷九七九「外臣部・奉使」)、「崔琳爲鴻臚卿、玄宗開元十九年以奉使人蕃、特加御史大夫、寵之也。」(『冊府元龜』卷六五四「奉使部・恩獎」)。
- (32) 白居易「賈隣入回鶻副使授兼御史中丞賜金魚袋制」に、「敕少府少監賈隣。行人之官、官必有介、所以敬主事而重國命也。(中略)宜假憲秩、仍加命服、以示兼寵。」とある。
 (『全唐文』六五七)
- (33) 前掲拙稿『隋唐外務官僚の研究』下編の第一部第一章「本官からみた遣外使節の選任傾向」(關西大學博士論文、一九九七年三月)を参照。
- (34) 『唐會要』卷六一「御史臺」中「館驛」。
- (35) 前掲大庭脩論文を参照。
- (36) 『舊唐書』卷一八九上「朱子奢傳」:「海夷頗重學問、卿爲大國使、必勿籍其束脩、爲之講說。使還稱旨、當以中書舍人待卿。子奢至其國、欲悅夷虜之情、遂爲發春秋左傳題、又納其美女之贈、使還、太宗責其違旨、猶惜其才、不至深譴、令散官直國子學。」
- (37) 『資治通鑑』卷二〇六・聖曆元年末の條。又は本稿の【表一】「武后朝」肅宗朝における對外使節の假官一覽」(No.2を参照)。
- (38) 『舊唐書』卷一八五下「和逢堯傳」。又は本稿の【表一】「武后朝」肅宗朝における對外使節の假官一覽」(No.7を参照)。
- (39) 『舊唐書』卷一四九「歸崇敬傳」。又は本稿の【表二】「肅宗朝」唐末における對外使節の假官一覽」(No.10を参照)。
- (40) 『冊府元龜』卷六五四「奉使部・恩獎」。又は本稿の【表二】「肅宗朝」唐末における對外使節の假官一覽」(No.22を参照)。
- (41) 『舊唐書』卷一三〇「關播傳」。又は本稿の【表二】「肅宗朝」唐末における對外使節の假官一覽」(No.36を参照)。
- (42) 『舊唐書』卷一八五「袁滋傳」。又は本稿の【表二】「肅宗朝」唐末における對外使節の假官一覽」(No.41を参照)。
- (43) 『舊唐書』卷一六三「胡証傳」。又は本稿の【表二】「肅宗朝」唐末における對外使節の假官一覽」(No.74を参照)。
- (44) 兩者はいずれも出使中に首尾よく使命を完うして派遣先より稱賛されたという理由により歸國後に昇進している。歸崇敬については、『舊唐書』卷一四九「歸崇敬傳」に「(歸崇敬)充弔祭册立新羅使。……故事、使新羅者、至海東多有所求、或攜資帛而往、貿易貨物、規以爲利、崇敬一皆絕之、東夷稱重其德。使還、授國子司業、兼集賢學士。」とある。關播については、『舊唐書』卷一三〇「關播傳」に「(關播)持節充送咸安公主及册可汗使、奉使往來、皆清儉謹慎、蕃人悅之。使迴、遷兵部尚書」とある。
- (45) 『唐會要』卷三二「輿服」上「章服品第」。
- (46) 『唐會要』卷三二「輿服」上「章服品第」。
- (47) 唐代における官人の常服制度の詳細については、黃正建『唐代衣食住行研究』(首都師範大學出版社、一九九八年)及び同氏「王涯奏文與唐後期車服制度的變化」(『唐研究』第一〇卷、北京大學出版社、二〇〇四年十二月)を参照。

- (48) 史料に見られる「賜縁」の対象は、主に「白身」、即ち科擧に合格しておらず出仕の資格のない者である。具體的には『冊府元龜』卷六〇「學校部・恩獎」、卷六五五「奉使部・恩寵」、『舊唐書』卷一七「敬宗本紀」を参照。
- (49) 『唐會要』卷三二「與服」上「魚袋」：「開府儀同三司、及京官文武職事四品五品、並給隨身魚袋。」「魚袋、著紫者金裝、著緋者銀裝。」
- (50) 『唐六典』卷八「符寶郎」の「隨身魚符之制」：「隨身者仍著姓名、並以袋盛、其袋三品已上飾以金、五品已上飾以銀。六品已下守五品以上者、不佩魚。」
- (51) 唐の隨身魚符に關する詳細については、布目潮瀨「唐代符制考——唐律研究（一）——」（『立命館文學』二〇七號、一九六二年）を参照。
- (52) 「大曆」三年、上遣倉部郎中、兼御史中丞、賜紫金魚袋歸崇敬持節齋冊書往弔冊之。」（『舊唐書』卷一九九上「新羅傳」）、「大曆初、以新羅王卒、授崇敬倉部郎中、兼御史中丞、賜紫金魚袋、充弔祭、冊立新羅使。」（『舊唐書』卷一四九「歸崇敬傳」）。
- (53) 「夏五月辛卯、冊爲崇徽公主、嫁廻紇可汗。壬辰、遣兵部侍郎李涵送之。涵奏祠部郎中虞卿董晉爲判官。」（『資治通鑑』卷二二四・大曆四年五月條、「公諱晉、（中略）兵部侍郎李涵如廻紇立可敦、詔公兼侍御史賜紫金魚袋爲涵判官。」（『全唐文』卷五六七・韓愈「董晉行狀」）。
- (54) 「韋丹、（中略）改駕部員外郎、會新羅國以喪來告、且請立君。拜司封郎中兼御史中丞、章服金紫、弔冊其嗣。」
- (55) 「『全唐文』卷七五四・杜牧「韋公遺愛碑」。
- (56) 「貞元」二十年冬、副工部侍郎張薦爲入吐蕃使、行至鳳翔、轉侍御史、賜緋袍牙笏。」（『舊唐書』卷一三七「呂溫傳」）。
- (57) 「（元和五年）七月、以陝州大都督府左司馬兼通事舍人李錡爲鴻臚少卿攝御史中丞、持節充入吐蕃使、仍賜紫金魚袋。」（『冊府元龜』卷九八〇「外臣部・通好」）。
- (58) 「召詔宗正少卿李孝誠使於回鶻、太常博士殷侗副之。」（『舊唐書』卷一九五「廻紇傳」）、「（元和）十二年詔曰、四方萬國、惟回鶻於唐最親、奉職尤謹、丞相其選宗室四品一人、持節往賜君長、告之朕意。又選學有經法通知時事者一人與之爲貳。由是殷侯相侑自太常博士遷尚書處部員外郎兼侍御史、朱衣象笏、承命以行。」（『全唐文』卷五五五・韓愈「送殷員外序」）。
- (59) 「敕、少府少監賈曠、行人之官、官必有介。（中略）斯可以倅貳使臣、諭申朝旨、宜假憲秩、仍加命服、以示兼寵。」（『全唐文』卷六五七・白居易「賈曠入回鶻副使授兼御史中丞賜金魚袋制」）。
- (60) 「十月辛酉、以太子僕杜載爲太僕少卿兼御史中丞、持節充答吐蕃謝會盟禮畢使、仍賜金紫。」（『冊府元龜』卷九八〇「外臣部・通好」）
- (61) 「寶曆元年三月、以前蘄州刺史于人文爲司門郎中攝御史中丞、持節入回鶻充弔祭冊立使、仍賜紫金魚袋。（中略）四月、以前江南西道監察推官試大理評事陳瓌夫守河南府雒陽縣丞兼監察御史、充入回鶻弔祭冊立使判官、仍賜緋魚

袋。』(『冊府元龜』卷九八〇「外臣部・通好」)。

- (61) 「十月以岳王傳成抗爲右庶子兼御史中丞、充入吐蕃答賀正使、仍賜紫金魚袋。以太常博士劉幼復爲殿中侍御史爲之副、仍賜緋魚袋。以前萬年縣丞韓渾爲大理丞兼殿中侍御史、入吐蕃答賀正使判官、仍賜緋魚袋。』(『冊府元龜』卷九八〇「外臣部・通好」)。

- (62) 「李從易爲宗正少卿、文宗大和四年兼御史中丞賜紫金魚袋、充入吐蕃答賀正使。』(『冊府元龜』卷六六二「奉使部・絕域」)。

- (63) 「六年十一月、以少府少監田早(田羣の誤——石注)守本官兼御史中丞、持節充入吐蕃答賀正使、仍賜紫金袋。』(『冊府元龜』卷九八〇「外臣部・通好」)。

- (64) 「四月制曰…(中略)今遣使寧遠將軍、右金吾將軍兼御史大夫上柱國賜紫金魚袋唐弘實、副使中大夫將作少監兼御史中丞賜紫金魚袋嗣澤王容等持節備禮、冊爲(下略)』(『冊府元龜』卷九六五「外臣部・封冊三」)。

- (65) 「公諱建章、字會王、中山北平人也。(中略)渤海國王大彝震遣司賓卿賀守謙來聘。府選報復、議先會主、假幽州司馬、朱衣使行。癸丑(太和七年—石注)秋、方舟而東。』(『唐代墓誌匯編』中和〇〇七「張建章墓誌銘」)。

- (66) 「十一月、李德裕上言…今回鶻破亡、大和公主未知所在(中略)請遣通事舍人苗續齋詔詣溫溫斯、令轉達公主、兼可卜溫沒斯逆順之情。從之。』(『資治通鑑』卷二四六・會昌元年十一月條)、「會昌初、廻紇以喪亂來告、詔公以本

官兼御史中丞服三品衣魚、往存撫之。(中略)既行、則深入其寇、直見公主。』(『唐代墓誌匯編』會昌〇三一「苗續墓誌銘」)。

- (67) 「今遣使臣朝議郎、檢校祕書監、兼衛尉少卿、御史中丞、上柱國、賜紫金魚袋王端章、副使臣朝議郎、檢校尚書工部郎中、兼國子禮記博士、御史、賜緋魚袋李潯持節備禮。』(『唐大詔令集』卷二九「冊回鶻可汗文」)。

- (68) 「唐會要」卷三二「與服」上「内外官章服」同記事の割注「天授二年八月二十日、左羽林大將軍建昌王攸寧、賜紫金袋、九月二十六日、除納言、依舊著紫袋金龜。借紫自此始也」によれば、「借紫」の起源は武后朝の天授二年(六九一)に遡られる。

- (69) 『唐代墓誌匯編』會昌〇三一「苗續墓誌銘」。

- (70) 『全唐文』卷五五五・韓愈「送殷員外序」。

- (71) 『唐代墓誌匯編』中和〇〇七「張建章墓誌銘」。

- (72) この問題については、坂元義種氏が古代東アジアの國際關係を論じられる時(坂元義種「古代東アジアの國際關係——和親・封冊・使節よりみたる——」、同氏「古代東アジアの日本と朝鮮」所收 吉川弘文館 一九七八年)に觸れているが、しかし、坂元氏の論文には、ただ『冊府元龜』外臣部の記述だけに基づいて古代中國王朝の遣外使節の身分地位を列擧して、そのうち、隋唐時代の對外使節の本官と假官を混淆している箇所が多いと見られるので、再検討の必要があると思われる。

each government office became a sort of notice board, it would not be unusual to have multiple imperial edicts and judicial precedents. Although there was no single code of law in effect throughout the land during the Han dynasty, local officials were able to know the content of the law because of the existence of this *qieling* system.

HONORIFIC TITLES AND “BORROWED RANKS” ACCORDED THOSE ON FOREIGN MISSIONS DURING THE PERIOD OF THE SUI AND TANG DYNASTIES

SHI Xiaojun

This article examines previously unexplored aspects of the system of honorific titles 假官 “borrowed” ranks 借位 (known as *ci zifei yudai* 賜紫緋魚袋) accorded those on foreign missions in light of historical records. The following conclusions have been made on the basis of this examination.

In the case of the Sui dynasty, in contrast to the early period, during the reign of Wendi, when the main honorary title was Sanqi changshi 散騎常侍 (Cavalier Attendant-in-ordinary) and junior third rank was granted, during the later period of the reign of Yangdi the reality of the system of honorary titles is generally unclear. However, judging from the various accounts of the offices of Pei Shiqing 裴世清, who was dispatched to Japan, it appears that an office in the Honglusi 鴻臚寺 (Court of State Ceremonial) was temporarily awarded to someone sent on a diplomatic mission in the later period.

During the Tang, there are at first examples of Sanqi changshi being provisionally awarded to those sent on foreign missions, but during the period from Wuhou to Xuanzong, it appears that the honorific title was gradually fixed at one in the diplomatic office of Honglu (the Honglu Qing 鴻臚卿 or Honglu Shaoqing 鴻臚少卿). This can be deemed the main characteristic of the system of honorific titles for those sent on missions in the first half of the Tang.

There was a change in the honorific titles for those on foreign missions following the Xuanzong era. They were now chiefly a variety of posts, which were judicial offices 憲職, in the Yushitai 御史臺 (Censorate). With the exception of the Zhongshi 中使 (Imperial Commissioners), almost all members of missions (including the Liaozuo 僚佐, low-level staffers) also held judicial posts in the censorate. Even the members of foreign missions who held as their main posts

the honorific titles of Sanqi changshi or Hongluqing came to hold judicial offices at the same time. Judging from the fact that the court rank of the original posts of the members on foreign missions were higher than the ranks of the honorific judicial posts they received, it is clear that the chief purpose of the shift of the provisional offices for members on foreign mission to judicial posts was not intended to raise their ranks, but it should be understood as aimed at enhancing the prestige of the mission by borrowing the prestige of judicial offices. This is the most important characteristic of the honorific titles for those on foreign missions during the latter half of the Tang.

Furthermore, judging from the situation of the changes in posts after their return from abroad, honorific titles for those on foreign missions were ultimately only a provisional device for officials when they were abroad and were unrelated to domestic transfers and changes of office. Once they returned from abroad, the title lost all validity.

On the other hand, in addition to honorific titles, *ci zifei yudai*, the grant of the purple or scarlet pouch for a fish-shaped talisman, was also awarded to those on foreign missions in the latter half of the Tang. This seems likely to have been a continuation of the system of *jiezi* 借紫 (“borrowed” purple) and *jiefei* 借緋 (“borrowed” scarlet) for those on foreign missions that was found in the ordinances of the Kaiyuan era. In other words, considering the extraordinary gap between the court rank of the main post of those sent on a foreign mission and the court rank associated with the *ci zifei yudai*, the system of the *ci zifei yudai*, like that of honorific titles, seems to have been one of provisional ranks that was in effect only while the official was abroad and designed to raise the status of those on the mission.

YĀR MOḤAMMAD KHĀN IN HERĀT: THE POLITICAL RELATIONSHIP BETWEEN IRAN AND AFGHANISTAN IN THE MID-19th CENTURY

KOMAKI Shōhei

There were three regional powers, Kābul, Qandahār, and Herāt, in 19th century Afghanistan. Yār Moḥammad Khān Alikozaʾī was the minister of Kāmraṇ Mīrzā, who ruled the city of Herāt in western Afghanistan. Herāt was incessantly